

# 平安京右京六条二坊三町跡

平安京右京六条二坊三町跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京右京六条二坊三町跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路拡幅事業に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

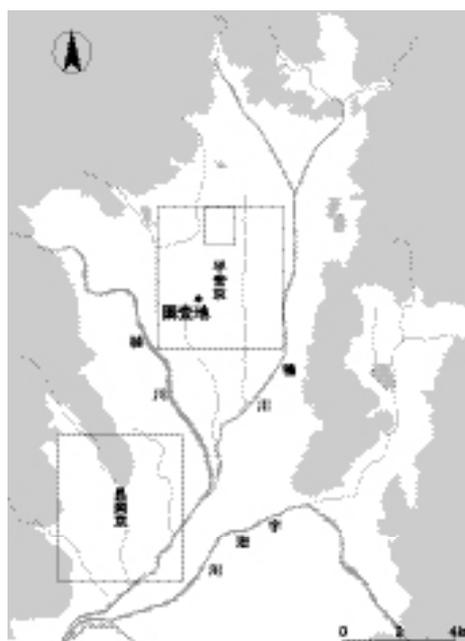
平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |             |  |
|-------------|--|
| 1 遺跡名       | 平安京右京六条二坊三町跡   |
| 2 調査所在地     | 京都市下京区西七条東御前田町地内                                       |
| 3 委託者       | 国土交通省近畿地方整備局 京都国道事務所長 丹羽克彦                             |
| 4 調査期間      | 2006年11月28日～2007年3月16日                                 |
| 5 調査面積      | 1,160 m <sup>2</sup>                                   |
| 6 調査担当者     | 小檜山一良・ト田健司   |
| 7 使用地図      | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）「山ノ内」「壬生」「西京極」・「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系     | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）                        |
| 9 使用標高      | T.P.：東京湾平均海面高度   |
| 10 使用基準点    | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。                      |
| 11 使用土色名    | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。                      |
| 12 遺構番号     | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                                   |
| 13 遺物番号     | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                                    |
| 14 掲載写真     | 村井伸也・幸明綾子  |
| 15 遺物復元     | 村上 勉・出水みゆき   |
| 16 自然遺物分析   | 竜子正彦   |
| 17 基準点測量    | 宮原健吾   |
| 18 本書作成     | 小檜山一良  |
| 19 編集・調整    | 中村 敦・児玉光世  |
| 20 石材の鑑定は、李 | 永一氏（日本地学研究会）にご教示を得た。記して謝意を申し上げる。                       |

(調査地点図)



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 検出した遺構	9
4. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器類	20
(3) 瓦類	31
(4) その他の遺物	32
5. ま と め	35
(1) 三町周辺の変遷	35
(2) 池について	36

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査地全景（東から）
		2 埋納土壙 174（北東から）
		3 溝 179・196、柱穴群（北から）
図版2	遺構	1 池 239 の中島（北東から）
		2 池 252（北東から）
		3 流路 254（北から）
		4 整地 253 土器出土状況（北東から）
図版3	遺物	土器類
図版4	遺物	土器類・瓦類

# 挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図2	調査前全景 (西から)	2
図3	作業風景	2
図4	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図5	右京六条二坊三町調査区位置図 (1 : 2,000)	3
図6	周辺既往調査位置図 (1 : 5,000)	5
図7	北壁断面図 (1 : 80)	10
図8	南壁断面図 (1 : 80)	11
図9	東壁・断割り断面図 (1 : 80)	12
図10	第1 a面遺構実測図 (1 : 250)	13
図11	第2 a面遺構実測図 (1 : 250)	14
図12	第1 b面遺構実測図 (1 : 250)	15
図13	第2 b面遺構実測図 (1 : 250)	15
図14	埋納土壙 174 実測図 (1 : 20)	17
図15	柵 158 実測図 (1 : 80)	17
図16	池 239・池 252 実測図 (1 : 80)	18
図17	溝 179 出土土器実測図 (1 : 4)	21
図18	溝 196 出土土器実測図 (1 : 4)	22
図19	埋納土壙 174 出土土器実測図 (1 : 4)	22
図20	土壙 141 出土土器実測図 (1 : 4)	23
図21	土取り跡 232 出土土器実測図 (1 : 4)	24
図22	池 239 出土土器実測図 (1 : 4)	26
図23	池 252 出土土器実測図 (1 : 4)	27
図24	整地 253 出土土器実測図 (1 : 4)	29
図25	その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)	30
図26	黄釉褐彩貼花文水注	30
図27	出土瓦拓影・実測図 (1 : 4)	31
図28	その他の遺物実測図 (1 : 4)、銭貨拓影 (1 : 2)	32

図 29	その他の遺物	32
図 30	池 252 検出自然遺物	34
図 31	平安時代前期の園池検出地点	37

## 表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	20
表 4	池 252 検出自然遺物一覧表	33
表 5	平安時代前期の園池検出地点一覧表	38



# 平安京右京六条二坊三町跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

この調査は、平成18年度国道9号五条大宮拡幅事業に伴う調査である。調査地は、平安京右京六条二坊三町にあたり、『拾芥抄』西京図によれば「号山荘」跡と推定される。当地に国道9号線の拡幅工事が計画されたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が国土交通省近畿地方整備局から委託を受けて、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導により、発掘調査を担当した。これまで周辺では平安時代の遺構・遺物の発見があることから、平安時代の宅地班給や建物の配置などを知ることを主な目的とした。

### (2) 調査の経過

調査は、東西約55m・南北約21mの調査区を設定して開始した。調査面積は約1,160㎡である。

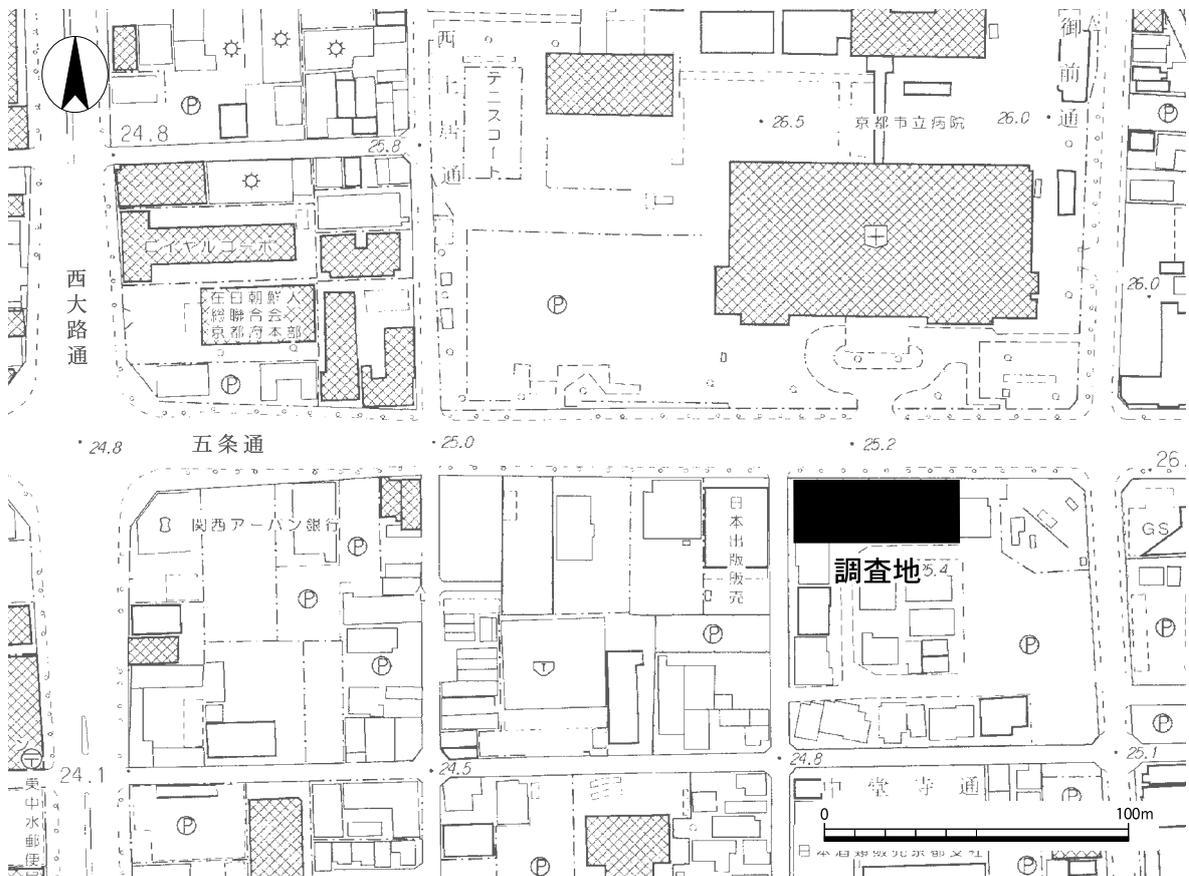


図1 調査位置図 (1:2,500)



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景

始めに、重機を使用して遺構面まで掘下げを行い、この間の排土は4tダンプで順次場外の土置き場に搬出し、人力での遺構調査を開始した。

近世から室町時代までの遺構を第1面で検出した。平安時代前期の遺構は東部の第2a面・2b面で検出した。古墳時代の遺構は平安時代の整地層下で検出した。おもな遺構には江戸時代以降の溝・柵・耕作土層など、室町時代の耕作土層、平安時代前期の土壙・溝・柱穴・池・埋納土壙・土取り跡など、古墳時代の流路などがある。

これら遺構の写真撮影・測量などの記録作業を調査の進行にあわせて行い、最後に下層遺構の有無と堆積状況を確認のするため調査区北・東・西壁と南壁の東半部に断割りを入れ、土層断面図を作成した。また、古墳時代の流路254は、北壁と南壁沿いに掘下げを行い、底部の確認と遺物の採集を行った。埋戻しを行い、作業を終了した。

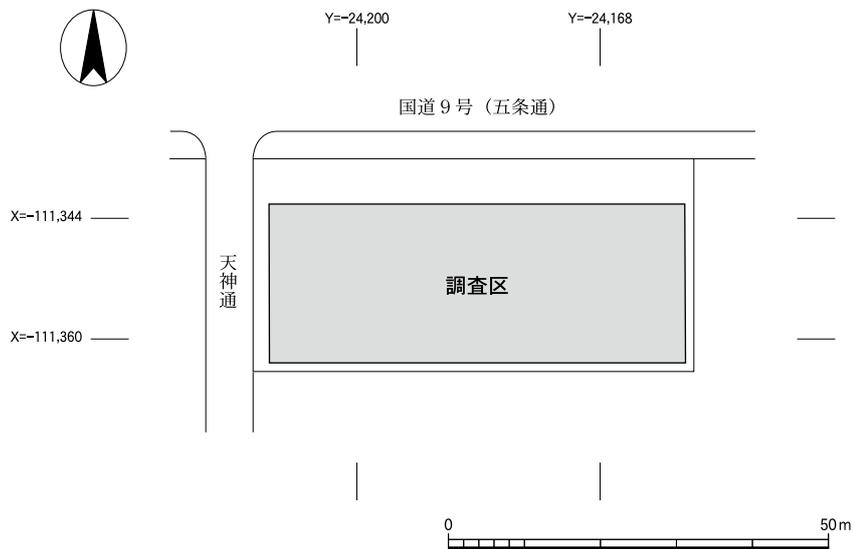


図4 調査区配置図（1：1,000）

## 2. 調査地の位置と環境

### (1) 位置と歴史的環境

調査地は、平安京右京六条二坊三町の北部にあたり、敷地の北側に六条坊門小路、東に西大宮大路、西に西鞠負小路、さらに南方には楊梅小路が推定される。また、四行八門制では、東二行北二・三門、東三行北二・三門、東四行北二・三門にあたり、三町のなかでは、およそ北西部の中央付近に位置する。

三町は、『拾芥抄』西京図によると「号山荘」であったとされている。号山荘の実態はよくわかっておらず、橘則光の山城国乙訓郡山方荘の一部となる可能性も指摘されている<sup>1)</sup>。周辺には、北西方向350mに西院遺跡、南方300mに衣田町遺跡など弥生時代から古墳時代の遺跡がある。また、南には平安京の官営市場である西市跡が位置する。

平安京造営以前から右京域にあたる部分は湿潤な土地環境にあり、平安時代中期以降に町が衰退するに従って、当地周辺もさびれていったとみられる。

中世になると、この辺り一帯は西七条村と呼ばれた。江戸時代には、村内を丹波街道が貫き同街道沿いに集落が形成された。この地では、おもに洛中ないし京に供給する農産物を生産していたとみられる。

### (2) 既往の調査

調査地周辺では、これまでに発掘調査・試掘調査・立会調査が実施され、報告されている。その調査成果を表1にまとめ、図6に調査地点を記した。ここでは、本調査地周辺の概要を述べる。

当三町内での発掘調査例はないが、調査地南側の住宅展示場敷地内で実施した立会調査では、平安時代の遺物包含層が検出されている<sup>2)</sup>。

二坊内での調査には、発掘調査を始めとして調査の成果が報告されている。北の二町では、京都市立病院敷地内で調査が数回実施されている。弥生時代の溝、平安時代前期の掘立柱建物4棟・井戸・溝・土壇、後期の土壇など、さらに中世の建物・溝などが検出されている。平安時代前期の西鞠負小路東築地に近い位置や町の中央付近で建物が検出されていることから、1町近くの占地も考えられている<sup>3)</sup>。

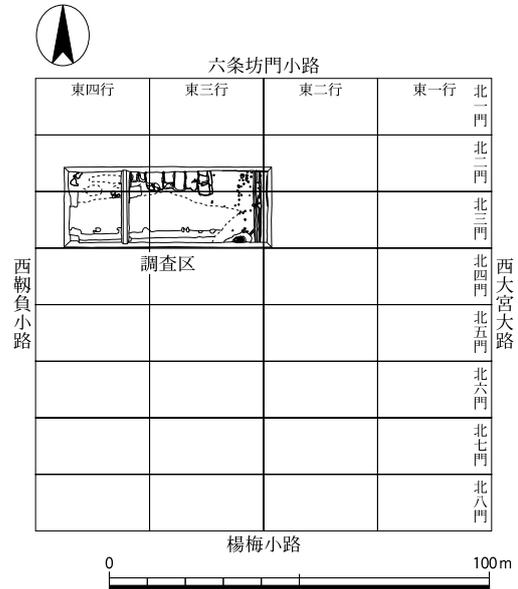


図5 右京六条二坊三町調査区位置図 (1:2,000)

西の六町では、立会調査により平安時代前期の井戸が検出されている。木枠や曲物が遺存していた。宅地内の建物の配置を推測できる資料である<sup>4)</sup>。

南の四町では、平安時代前期から後期の流れ堆積などが検出されている<sup>5)</sup>。

西大宮大路の東側にあたる東隣の一坊十四町では、平安時代前期の掘立柱建物8棟・柵10条・井戸3基・土壇・溝・川跡などが検出されている。平安京の造営を契機として、旧流路や湿地など窪地状を呈する自然地形が埋め立てられ宅地化していく過程が判明した<sup>6)</sup>。

十町では、古墳時代の流路、平安時代前期から中期の掘立柱建物6棟以上、柵列2条、土壇、溝状遺構を、さらに鎌倉時代から室町時代の南北・東西小溝群も検出した。十町の中央寄りに平安時代前期から中期まで、複数の建物が配置されていたことが判明している<sup>7)</sup>。

十五町では、平安時代の道祖大路東築地基礎、道祖大路東側溝、河川跡（道祖川）、また中世の耕作溝群も検出した。平安時代中期以降に築地や道路面が削平されていることがわかった<sup>8)</sup>。

これらからは、調査地周辺の平安京域が平安時代前期後半から中期の比較的早い時期に衰退していった状況がみてとれる。

#### 註

- 1) 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 3) 「平安京右京六条二坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 4) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 5) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 6) 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 「平安京右京六条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 8) 「平安京右京六条二坊2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年

#### 参考文献

- ・小澤嘉三『西院の歴史』西院の歴史編集委員会 1983年
- ・杉山信三「平安京右京の湿地について」『古代文化』40-9 古代学協会 1988年
- ・『京都市の地名』日本歴史地名大系第二七巻 平凡社 1979年

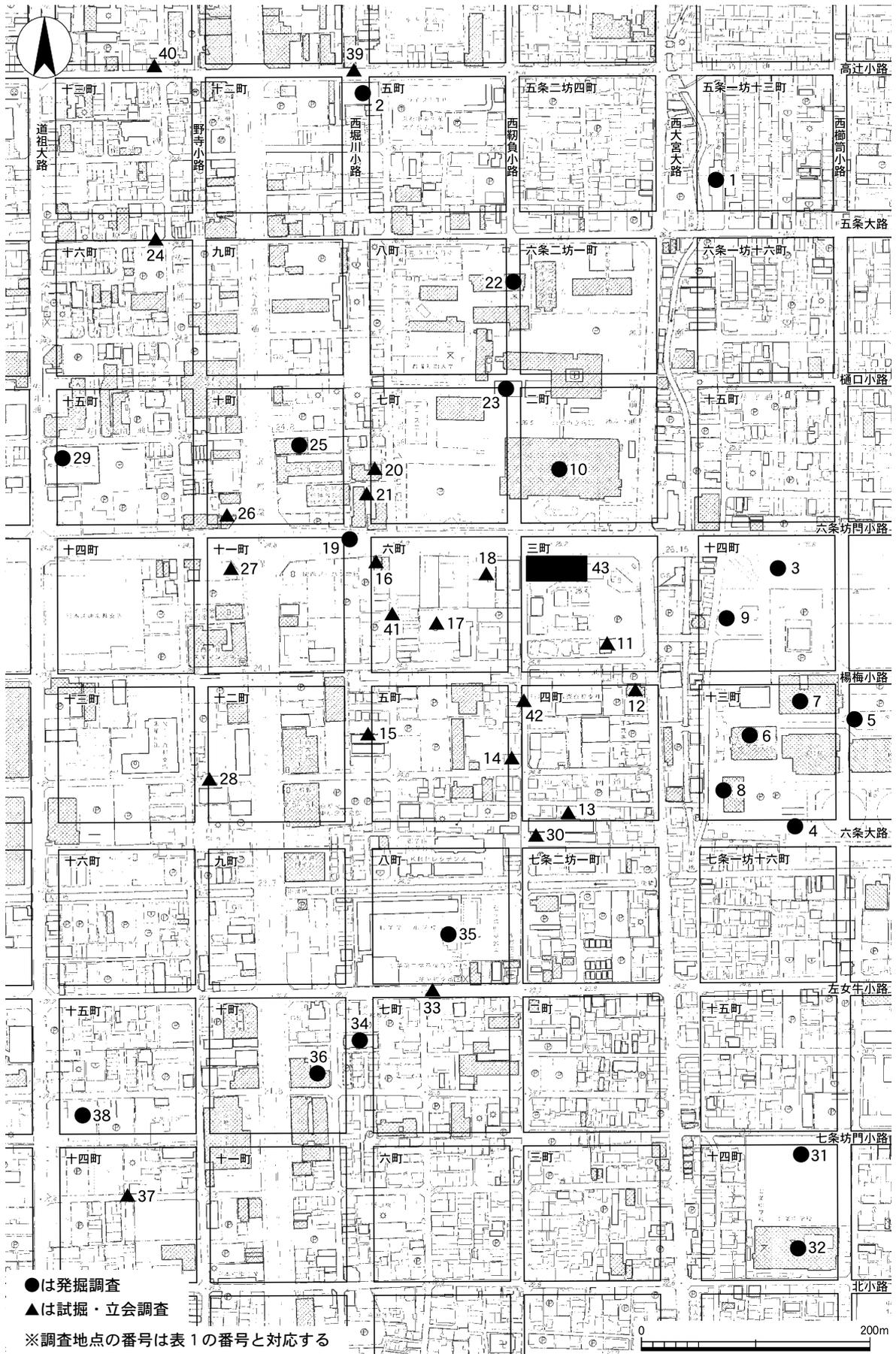


図6 周辺既往調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の調査一覧表

番号	遺跡名	調査方法	所在地	調査期間	遺構	文献
1	右京五条一坊十三町	発掘	中京区壬生下溝町45	1987.07.01～07.14	平安時代～鎌倉時代の土壇6基。江戸時代の溝、土壇5基。	文1
2	右京五条二坊五町	発掘	中京区壬生西桜町8-9	1980.10.15～10.31	平安時代の西堀川・東側溝・路面・築地跡・内溝、木棺墓、土壇、土壇墓。近世の旧耕土。	文2
3	右京六条一坊十一・十四町	発掘	下京区中堂寺栗田町地内	1995.04.10～12.01	縄文時代～古墳時代以前の河跡。古墳時代の河跡。平安時代の建物、柵、井戸、土壇、河跡。鎌倉時代の西櫛司小路西側溝？。近世以降の暗渠、競馬場濠。	文3
4	右京六条一坊十二・十三町、七条一坊十六町	発掘	下京区中堂寺栗田町1	1989.03.28～06.07	弥生時代～古墳時代の湿地(河川跡を含む)。平安時代の柱跡2基。平安時代後期の六条大路北側溝1条。江戸時代の土取穴、暗渠。	文4
5	右京六条一坊十二・十三町	発掘	下京区中堂寺栗田町1	1989.07.20～1990.05.30	平安時代の柱穴、井戸。平安時代～近代の溝、土壇。12町-7群の建物跡、13町-3群の建物跡、井戸、西櫛筒小路東側溝、門跡2ヶ所。	文5
6	右京六条一坊十三町	発掘	下京区中堂寺栗田町1	1991.11.18～1992.03.07	縄文時代～弥生時代の旧流路跡。平安時代の掘立柱建物8棟、柵、溝、井戸、湿地状遺構。近世以降の暗渠、土壇。	文6
7	右京六条一坊十三・十四町	発掘	下京区中堂寺栗田町1	1992.07.13～1993.01.14	縄文時代～弥生時代の河跡。古墳時代の河跡。平安時代の掘立柱建物、楊梅小路路面・側溝、土壇、門跡？。	文7
8	右京六条一坊十三町	発掘	下京区中堂寺栗田町地内	1996.09.02～12.28	平安時代の建物、溝、池。近世以降の暗渠、土取穴、競馬場濠。	文8
9	右京六条一坊十四町	発掘	下京区中堂寺栗田町地内	1994.08.29～1995.02.24	古墳時代～平安時代後期の河川旧流路。平安時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、柵。近世以降の土壇、溝。	文9
10	右京六条二坊二町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(京都市立病院)	1988.10.07～1989.01.10	(1区) 弥生時代の溝。平安時代前期の掘立柱建物3棟、南北溝2条。中世の建物1棟以上、東西溝1条。(2区) 平安時代前期の掘立柱建物1棟、井戸1基、土壇1基。	文10
11	右京六条二坊三町	立会	下京区西七条東御前田町24、赤社町20-1	2006.06.30	地表下1.8mで平安時代中期の包含層、土師器皿。1.35mで黄褐色砂礫の流れ堆積。1.6mで暗灰黄色砂礫の地山。	文11
12	右京六条二坊四町	立会	下京区西七条赤社町16	1987.06.11	地表下0.75mで平安時代前期～後期の流れ堆積。	文12
13	右京六条二坊四町	試掘	下京区西七条東御前田町50	1989.05.19	地表下0.8で平安時代後期の六条大路北側溝。	文13
14	右京六条二坊五町	試掘	下京区西七条東御前田町13・14～御前田町31	1988.02.15	(1区) 地表下0.8mで浅いシルト層が全域に堆積。平安時代前期の土師器、瓦。	文14
15	右京六条二坊五町	立会	下京区西七条東御前田町6-4	1990.07.19	No.1地点第3・4層は平安時代の可能性あり。	文15
16	右京六条二坊六町	立会	下京区西七条御前田町14-1・2	1981.03.26	地表下0.6mで落込み。平安時代の布目平瓦片、土師微片。	文16
17	右京六条二坊六町	試掘	下京区西七条御前田町24-2	1989.02.13	地表下1.5mで平安時代前期の井戸。曲物内には黒色土器。湿地状堆積。	文17
18	右京六条二坊六町	試掘	下京区西七条御前田町22	1985.10.04	地表下0.9mで遺物包含層(第1・2層)。	文18
19	右京六条二坊七町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(京都市立病院)	1979.02.01～03.15	平安時代の溝3条、土壇1基。近世の土壇4基。	文19
20	右京六条二坊七町	立会	中京区壬生東高田町4-1	1989.09.18	平安時代中期の土師器(第4・5層)、湿地状堆積。	文20
21	右京六条二坊七町	試掘	中京区壬生東高田町2	1990.05.21	西堀川の流路堆積。砂礫上面に平安時代の遺物。近世の土師器。	文21
22	右京六条二坊八町	発掘	中京区壬生東高田町	1976.11.20～12.27	古墳時代の溝。平安時代中期？の包含層。室町時代の溝2条(西鞠負小路側溝?)、柱穴。近世の包含層。	文22

番号	遺跡名	調査方法	所在地	調査期間	遺構	文献
23	右京六条二坊八町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(京都市立病院)	1979.02.01～03.15	平安時代の溝3条(西鞠負小路側溝)、土壇1基。近世の土壇4基。	文23
24	右京六条二坊九町・十六町	立会	右京区松原通、佐井通～西大路通地内	1998.10.19～11.12	地表下0.67～1.38m佐井川の堆積層。平安時代前期の鉢片。	文24
25	右京六条二坊十町	発掘	右京区西院高田町34	1987.05.22～07.02	古墳時代の流路。平安時代前期～中期の掘立柱建物6棟以上、柵列2条、土壇、溝状遺構。鎌倉時代～室町時代の南北・東西小溝群。	文25
26	右京六条二坊十町	立会	右京区西院南高田町34	1987.06.19	地表下0.3mで土壇2基。	文26
27	右京六条二坊十一町	立会	右京区西院南高田町3	1982.03.02	溝状遺構。淡黄灰色砂泥層より須恵器片。	文27
28	右京六条二坊十二町	立会	右京区西院中水町21-1、22-1	1997.04.10～04.21	野寺小路の両側溝、路面整地土、2時期。平安時代後期の土師器、須恵器、布目瓦の細片。	文28
29	右京六条二坊十五町	発掘	右京区西院寿町	1988.05.23～06.14	平安時代の道祖大路東築地・東側溝・道祖川。中世の溝、河川。	文29
30	右京七条一坊二町	試掘	下京区西七条東御前田町49	1981.7.21	地表下0.6mで平安時代中期の包含層	文30
31	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1980.08.26～10.20	弥生時代の方形周溝墓、溝。平安時代の建物、井戸3基、溝。	文31
32	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1997.09.24～1998.03.09	平安時代の掘立柱建物、井戸、柵列、溝、土壇。	文32
33	右京七条二坊二・七・十町	立会	下京区西七条掛越町～東石ヶ坪町	1989.09.02～11.19	地表下0.4mで平安時代の包含層。土師器、須恵器。0.9mで流れ堆積。	文33
34	右京七条二坊七町	発掘	下京区西七条西石ヶ坪町40	1983.04.20～05.14	平安時代中期～後期の溝3条(西堀川小路東側溝・東側築地内溝)、柱穴、土壇。鎌倉時代～室町時代の溝、包含層、土壇。近代～現代の溝、柱穴、杭列、土壇。	文34
35	右京七条二坊八町	発掘	下京区西七条西石ヶ坪町5(七条第三小学校)	1981.09.04～09.21	平安時代中期の東西溝1条。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、瓦。砂礫の流れ堆積、古墳時代の土師器、須恵器。	文35
36	右京七条二坊十町	発掘	下京区西七条比輪田町5-1、5-2、5-3	1990.07.06～09.20	飛鳥時代～奈良時代の自然流路。平安時代前期の掘立柱建物1棟、柵列2条、土壇、土壇状遺構、井戸跡。平安時代後期～鎌倉時代前期の東西・南北方向小溝群。鎌倉時代～室町時代の東西小溝群。桃山時代～江戸時代の東西小溝群。	文36
37	右京七条二坊十四町	立会	下京区西七条名倉町～比輪田町地先	1997.03.11～03.27	地表下0.3mで平安時代中期の包含層。土師器、須恵器、黒色土器。0.9mで湿地状堆積。	文37
38	右京七条二坊十五町	発掘	下京区西七条名倉町14・15、比輪田町16	1988.05.10～07.27	古墳時代の河川1条。平安時代の掘立柱建物6棟、柵列1条、井戸1基、溝2条、土壇、ピット、河川1条。中世以降の溝多数。	文38
39	右京五条・六条二坊	立会	右京区西院高田町地先～中京区壬生東高田町地先	1981.06.18～1982.03.31	平安時代以前の溝状遺構。平安時代の側溝(西鞠負小路西・西堀川小路東)、土壇状遺構。平安時代前期～後期の西堀川小路、西堀川。	文39
40	右京五条・六条二坊	立会	右京区西院矢掛町30地内～西院高田町地内	1982.04.13～07.13	(A区)弥生時代中期の包含層(堅穴住居跡?)。(C2区)平安時代以降の道祖川流路。	文40
41	右京六条二坊	立会	下京区西七条東御前田町	1984.12.08～12.25	平安時代の遺物包含層。	文41
42	右京六条・七条二坊	立会	右京区西院高田町24地先～下京区西七条北輪田町9地先	1983.06.07～07.18	平安時代の井戸。平安時代～鎌倉時代の溝。近代の溝。	文42
43	右京六条二坊三町	発掘	下京区西七条東御前田町	2006.11.28～2007.03.19	平安時代の池、溝、土壇、柱穴。室町時代～江戸時代の耕作溝。近代の耕作溝。	本報告

参考文献（表1 周辺の調査一覧表）

- 1 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 2 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 3 『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 4 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 6 『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 9 『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 11 『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 12 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 13 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 14 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 15 『京都市内遺跡試掘立会調査概要 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 16 『京都市内遺跡試掘・立会調査概要 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 17 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 18 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 19 『史料京都の歴史 第2巻考古』平凡社 1983年
- 20 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 21 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 22 『史料京都の歴史 第2巻考古』平凡社 1983年
- 23 『史料京都の歴史 第2巻考古』平凡社 1983年
- 24 『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 25 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 26 『京都市内遺跡試掘立会調査概要 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 27 『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
- 28 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 29 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 30 『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1981年
- 31 『平安京提要』角川書店 1994年
- 32 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 33 『京都市内遺跡試掘立会調査概要 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 34 『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 35 『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 36 『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 37 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 38 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 39 『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 40 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 41 『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 42 『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図7～9)

調査地は、調査前までは住宅展示場であり、全体が北側の五条通歩道とほぼ同じ高さに整地がなされていた。調査地が住宅展示場となる以前は、(株)大阪ガスのグラウンドであり、図7 北壁断面図の地表下約0.3mに位置する10YR5/8黄褐色砂層は当時のグラウンド面である。さらに下層の地表下約0.7mは石炭ガラ層である。これらが地表下0.9mまで堆積する現代盛土層である。

その下1.2mまで室町時代から江戸時代以降の耕作土層とみられる10YR3/1黒褐色砂泥層が0.1～0.3m堆積する。図7 北壁断面図や図9 東壁断面図では、畝の盛り上がりが明確にみられる。その下には、厚さ約0.1mの10YR4/3にぶい黄褐色泥土の床土層が広がる。

さらに下に平安時代の10YR5/3にぶい黄褐色砂泥の整地層が厚い部分では0.4mある。その下は灰褐色系砂礫層の地山となる。平安時代の遺構面は平安時代整地層および地山面の上面であり、標高はおよそ24.4mである。

調査区の中央やや西よりの地点 (Y=-24,190) で行った断割りでは、北から南に傾斜して堆積した砂礫および細砂層を確認した。これらの層は大まかには8層あり、河川の洪水層とみられる。いずれも堅くしまった堆積層であり、無遺物層であった。

調査区の東辺と北辺に10YR5/4にぶい黄褐色系の粘質土層が約0.5mの厚さで堆積している。図7 北壁断面図のY=-24,172以西の土取り跡230・231・266・233・232・235・236・258・259は、このにぶい黄褐色系の粘質土を採掘した跡である。それ以外の部分は7.5YR4/2灰褐色砂礫が主体となる地山層であった。

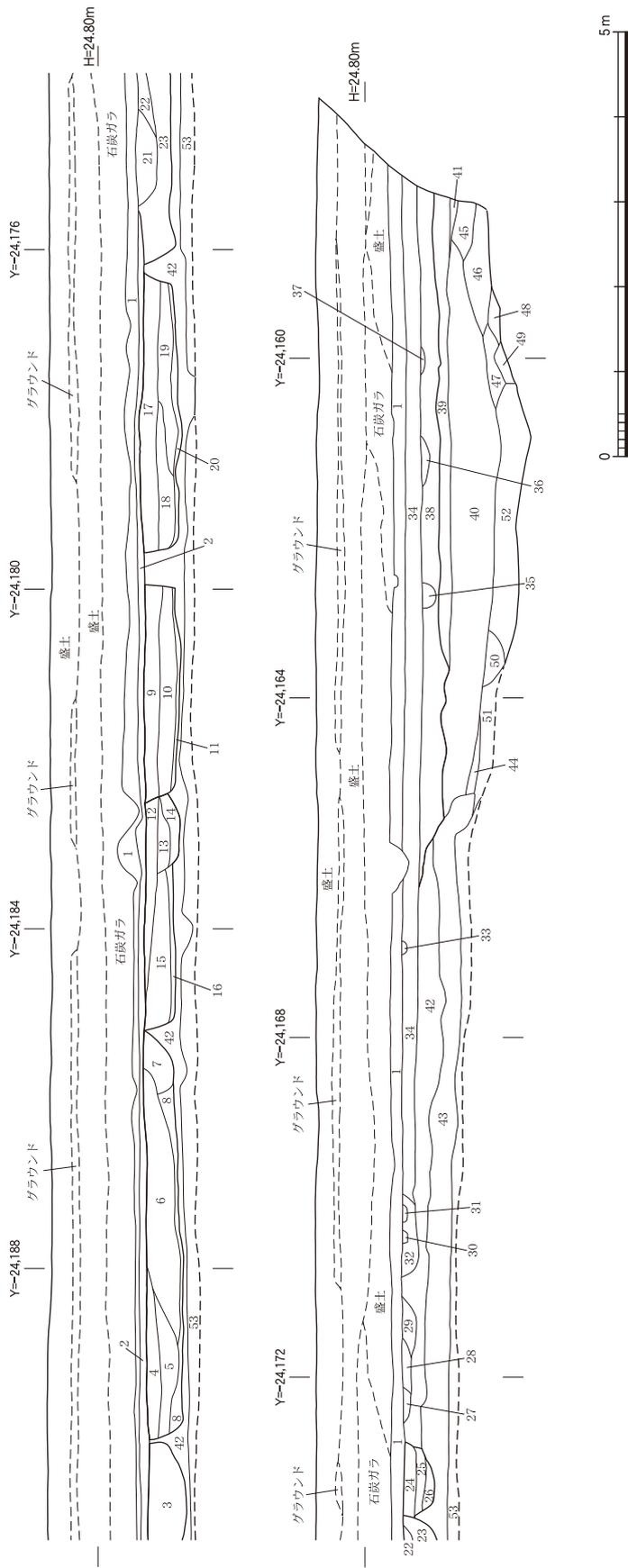
#### (2) 検出した遺構

##### 第1a面 (図10)

この面で検出した遺構は、江戸時代以降の溝・柵、室町時代の溝などである。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	流路254	東西幅9m以上、深さ1.5m
平安時代	池239・252、土壙141、埋納土壙174、溝179・196・250、柵158、土取り跡230・231他、柱穴265・266他、整地253	池は239が新期、252が古期。溝179・196は三町の中心付近に位置する。
室町時代	溝123～126他	耕作関連の溝
江戸時代以降	溝、暗渠、水路、柵	耕作関連の溝



- 1 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色泥土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡259)
- 4 10YR3/2 黒褐色泥礫 (土取り跡258)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡258)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡236)
- 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡236)
- 8 10YR4/4 褐色砂泥 (土取り跡236)
- 9 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡232)
- 10 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土取り跡232)
- 11 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡232)
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡235)
- 13 10YR7/2 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡235)
- 14 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡235)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡235)
- 16 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡235)
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡233)
- 18 10YR7/2 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡233)
- 19 10YR4/6 暗褐色砂泥 (土取り跡233)
- 20 10YR4/4 褐色砂泥 (土取り跡233)
- 21 10YR6/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡231)
- 22 10YR7/2 にぶい黄褐色砂泥 (土取り跡231)
- 23 10YR6/1 褐色砂泥 (土取り跡231)
- 24 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (土取り跡230)
- 25 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土取り跡230)
- 26 10YR4/4 褐色砂泥 (土取り跡230)
- 27 10YR4/6 褐色砂泥
- 28 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝96)
- 29 10YR4/4 褐色砂泥 (溝107)
- 30 10YR4/6 褐色砂泥 (溝108)
- 31 10YR4/4 褐色砂泥 (溝98)
- 32 10YR4/6 褐色砂泥 (溝78)
- 33 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝13)
- 34 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (溝103)
- 35 10YR4/2 灰黄褐色砂泥粘質 (柱穴143)
- 36 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 (溝196)
- 37 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝179)
- 38 10YR4/6 褐色砂泥 (整地253)
- 39 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (流路254)
- 40 10YR3/1 黒褐色泥土 (流路254)
- 41 10YR3/2 黒褐色砂泥 (流路254)
- 42 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥粘質強い
- 43 10YR4/4 褐色~4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 44 10YR5/1 褐色砂泥
- 45 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、一部泥土混
- 46 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 47 7.5YR3/4 暗褐色砂泥
- 48 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+7.5YR3/4 暗褐色細砂泥
- 49 10YR3/2 黒褐色砂泥+7.5YR3/4 暗褐色細砂泥
- 50 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 51 10YR4/4 褐色砂泥
- 52 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 53 10YR4/2 灰黄褐色砂泥

図7 北壁断面図 (1:80)

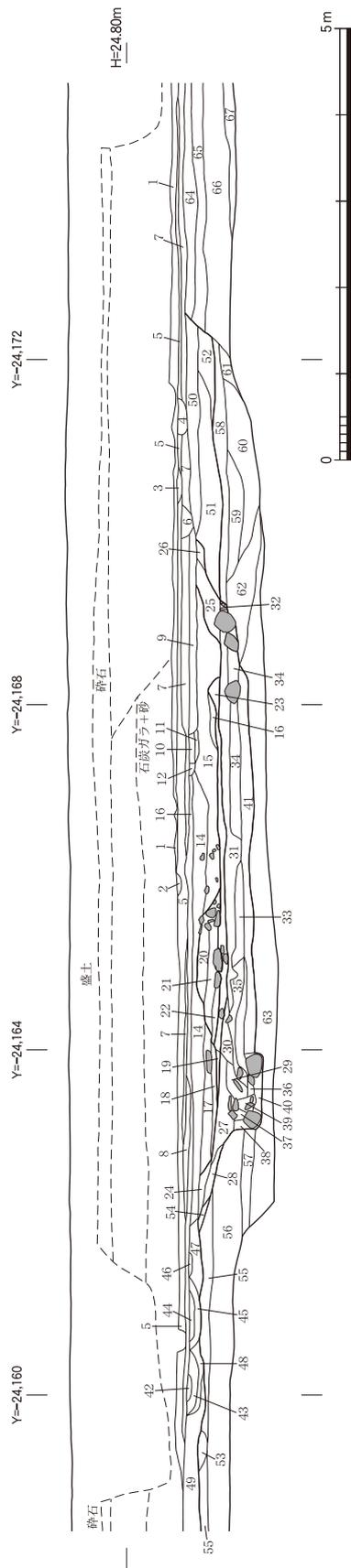


図8 壩壁断面図 (1:80)

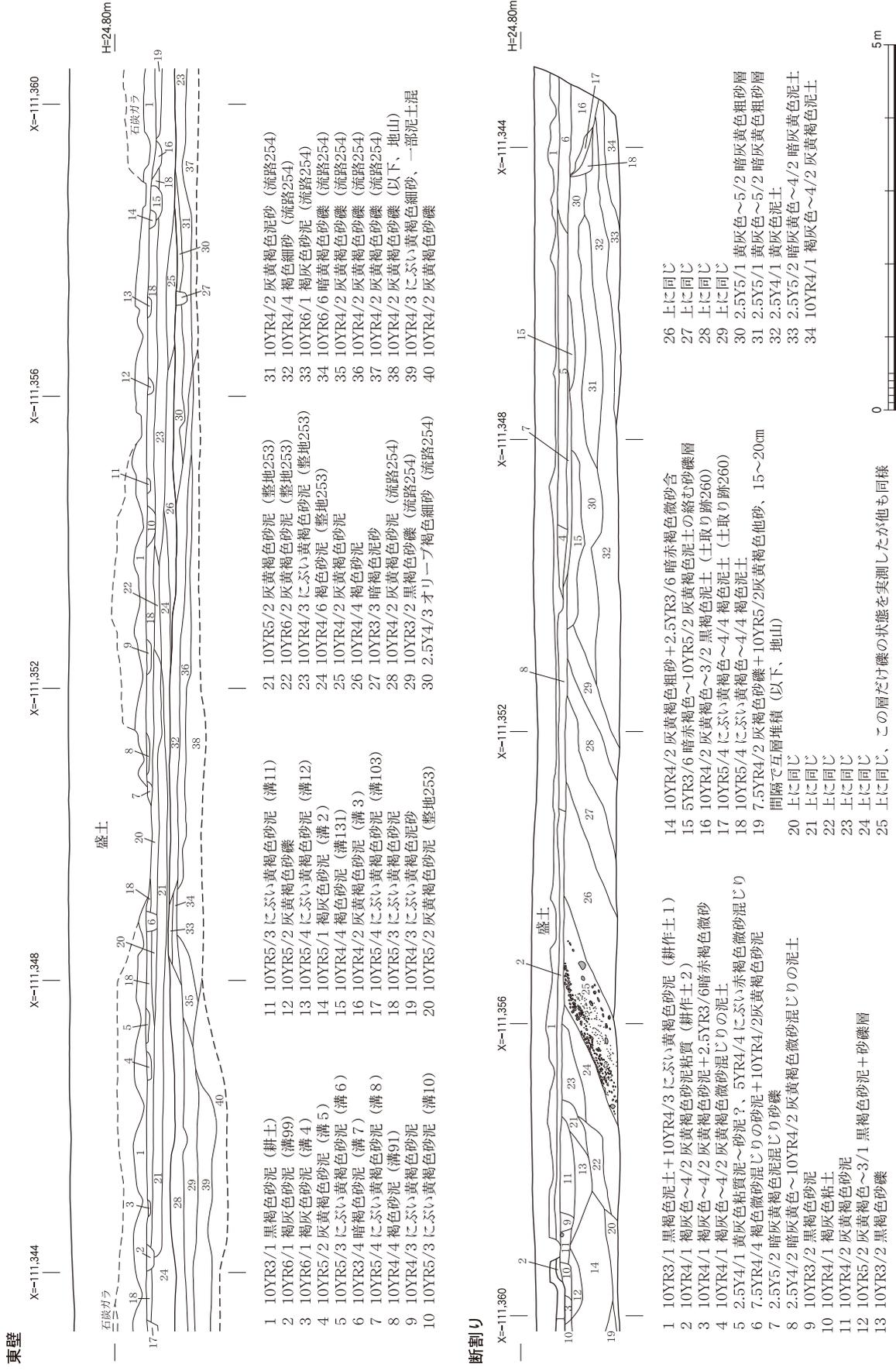


図9 東壁・断割り断面図 (1:80)

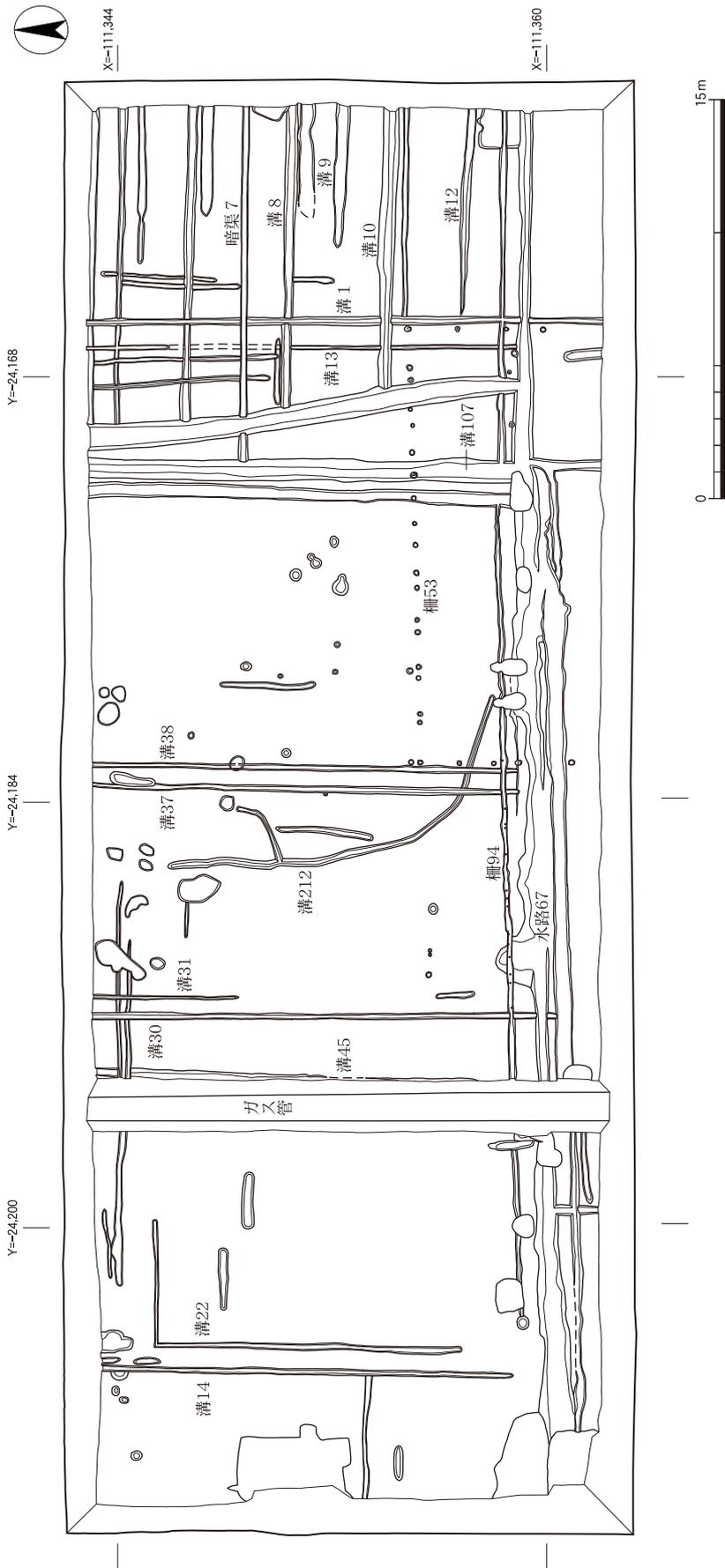


图 10 第 1 a 面遺構実測図 (1 : 250)





图 12 第 1 b 面遺構実測図 (1 : 250)

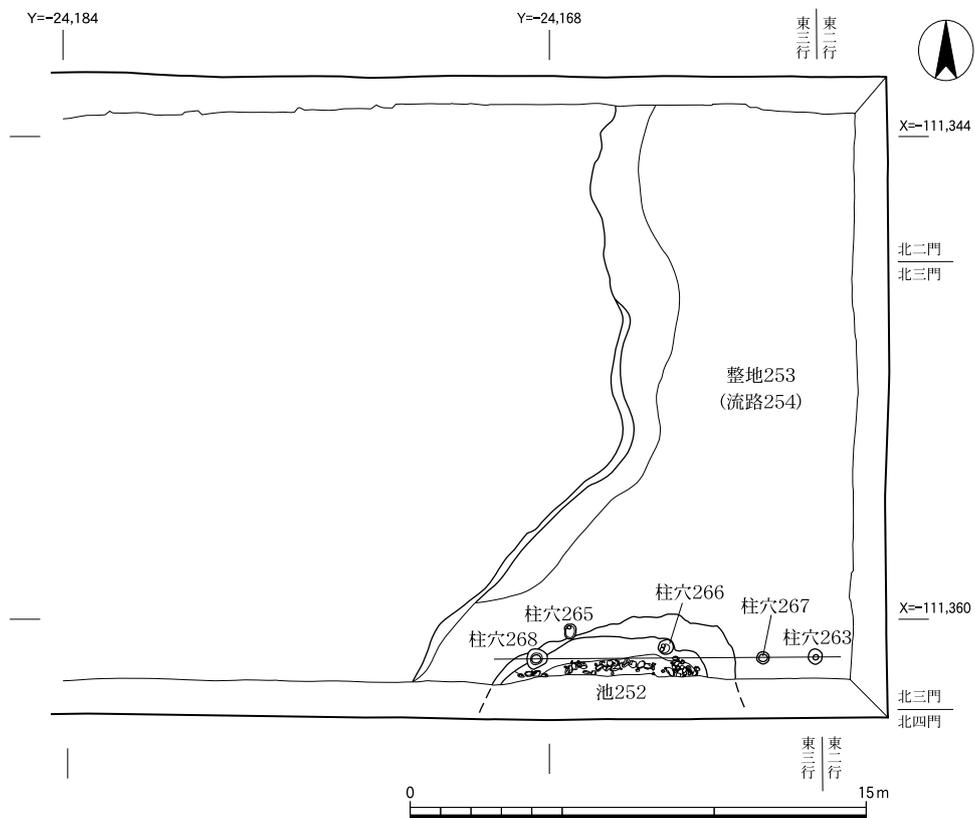


图 13 第 2 b 面遺構実測図 (1 : 250)

当地の旧地形は、東から西に向かって1段、また、北から南に1段下がった平坦な面となる。西に下がる地点は、Y=-24,183地点で、南に下る地点は、X=-111,357地点である。それぞれ約0.1m低くなる。緩やかな傾斜のあった旧地表面を耕作地の造成に伴って、ひな壇状に削平した結果とみられる。この面では耕作に関連する溝を多く検出した。

**溝 1・13・37・38他** おもに調査区の東部で検出した。幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.2mの小規模な溝である。南北方向もあるが、東西方向が多い。形状として、素掘りのものがほとんどを占める。1・13、37・38、30・31、14・22など対のようになっているものもある。間隔はそれぞれ0.8～1mである。埋土は10YR6/1褐灰色系の砂泥が最も多い。耕作に関連する溝と考えられる。遺物は江戸時代以降のものが主体で、平安時代や室町時代のものも少量出土した。

**暗渠 7** 調査区の東部で検出した。幅0.3m、深さ0.2mで、5cm大の小礫を溝内に充填する。東西方向。江戸時代の遺物が出土した。

**水路67** 調査区の南部で検出した。幅0.8m、深さ0.3mで、溝の内側に木杭を打ち込んで護岸する。東西方向に50m以上を検出した。底部には砂の堆積が認められる。

**柵53・94** 調査区の南部で検出した。94は幅0.3m、深さ0.1mの布掘り掘形である。内部にほぼ等間隔に木杭を打ち込む。東西方向に45m以上を検出した。また、約3m北には、東西方向の柵53もみられる。東西方向に17mあり、西端と東端で南に曲がる。区画に関連する遺構とみられる。

#### 第1b面 (図12)

調査区の東部で、東壁第18層の10YR5/3にぶい黄褐色砂泥などを除去した面（1面と2面の間）で、多くの小規模な溝を検出した。

**溝 123～126・129・130他** 調査区の東部で検出した。北側の123～126などは南北方向、南側の129・130は北東から南西方向の傾きである。幅約0.1mの細い溝で、中に小礫を充填する。1面と同様に東部分に集中して検出した。耕作に関連する湿気抜きの溝とみられる。平安時代から室町時代の遺物が出土する。

#### 第2a面 (図11)

東壁第21層の10YR5/2灰黄褐色砂泥層などを掘り下げた面で検出した平安時代前期の遺構群である。東部で南北方向の溝を2条検出した。溝の西側では、多数の柱穴を検出した。南部では池北岸の一部を検出した。中部北側には、黄褐色系粘質土層の広がりがあり、この部分に大型の土取り跡が多数存在する。

**溝 179** 調査区の東端付近で検出した南北方向の溝である。幅約0.6m、深さ0.2mの規模。埋土は3層に分かれる。京都Ⅱ期中～新段階<sup>1)</sup>の遺物が出土した。土壌141に切られている。

**溝 196** 調査区の東端付近で検出した南北方向の溝である。幅約0.9～1.1m、深さ0.2mの規模。埋土は3層に分かれる。京都Ⅱ期中～新段階の遺物が出土した。溝179の約0.5m西側に位置する。溝179とは切り合いがないため先後関係は不明であるが、併存していた可能性も考えられる。

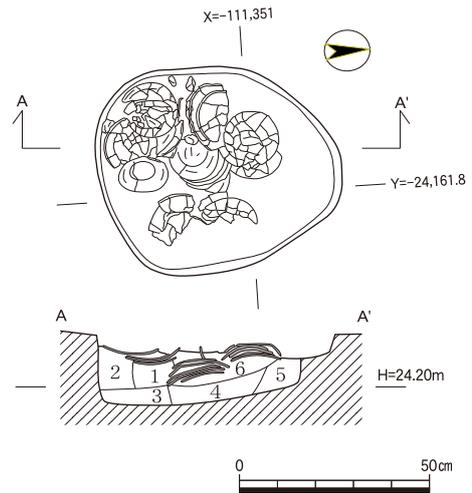
**土壙 141** 調査区の東端付近で検出した土壙である。東西約1m、南北約1.7m、深さ0.1mの規模。土師器や緑釉陶器など多くの土器類が出土した。京都Ⅱ期中～新段階にあたる。

**埋納土壙 174** 調査区の東端付近で検出した土壙である。径約0.7m、深さ約0.2mの規模。土師器碗・皿が合わせて32枚以上出土した。内面を上に向けて重ねたものと、伏せて重ねたものがほとんどである。地鎮などに関連する遺構と考えられる。溝197に東半部を壊されている。京都Ⅱ期中段階にあたる。

**柵 158** 調査区の東端付近で検出した。南北方向の柱列で、柱穴は5基（158・157B・160・164・165）検出した。掘形は0.3m前後の隅丸方形で、深さは0.15m前後、柱当痕跡のわかるものは径0.1mほどであった。柱間は北から1.7m、1.7m、1.8m、1.2mと揃わない。主軸は北で東に約2°振れる。

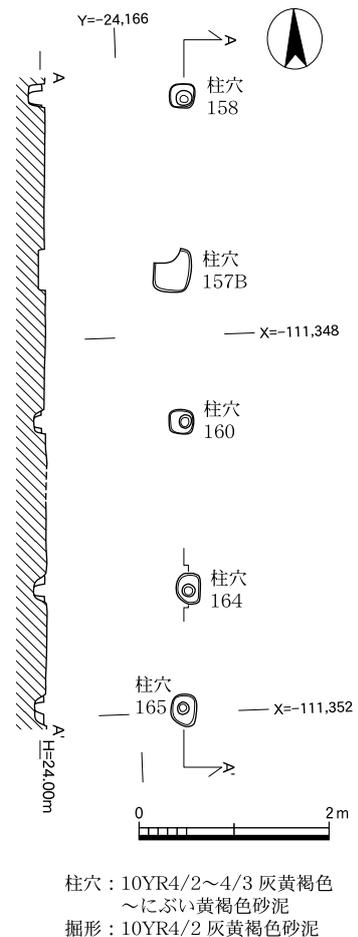
**土取り跡群** 調査区の中央部北側で土取り跡230・231・233・232・235・236・258・259・260など多数検出した。土取り跡232は東西約2.9m、南北約4.9m、深さ0.5mの規模である。この地点に堆積する黄褐色系粘質土を採掘したものである。ほとんどの土壙は深さが約0.5mで、10YR4/2灰黄褐色砂礫層となるため、この深さで採掘を止められている。他の土取り跡も西側の2基以外は東西幅は3m前後であり、一定の規格が認められる。埋土には、京都Ⅱ期中～新段階の遺物が多量に廃棄されていた。

**池 239** 調査区東部南側で検出した。東西7.7m以上、南北2.8m以上、深さ0.4mを確認している。小石を敷きつめる洲浜をもち、汀はなだらかに南に傾斜していく。北端部には長径0.3mの景石が残る。東側寄りには、河原石で護岸した中島がある。中島は東西幅が約2.5mあり、検出した高さは約0.4mである。礫を多く含んだ灰黄褐色砂泥層が3層積まれていることが確認できた。上部は削平されているとみられる。中島に配される石は平坦な石材が多く、選択して使用しているとみられる。0.1～0.4mの大きさがあり、0.2～0.3m大が多く含まれ



- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、やや砂っぽい
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色～5/2 暗灰黄色砂泥
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 6 2.5YR5/3 黄褐色砂泥

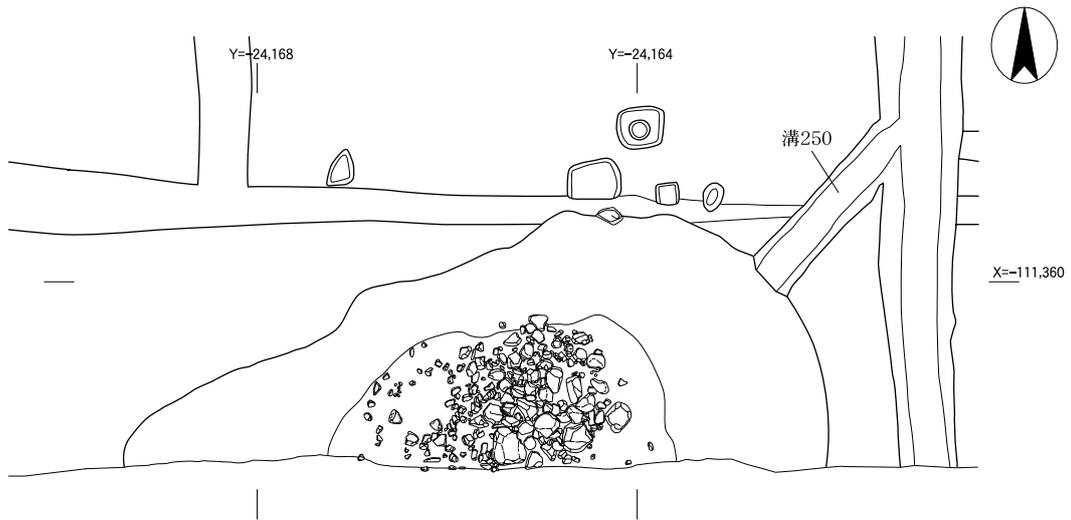
図 14 埋納土壙 174 実測図 (1 : 20)



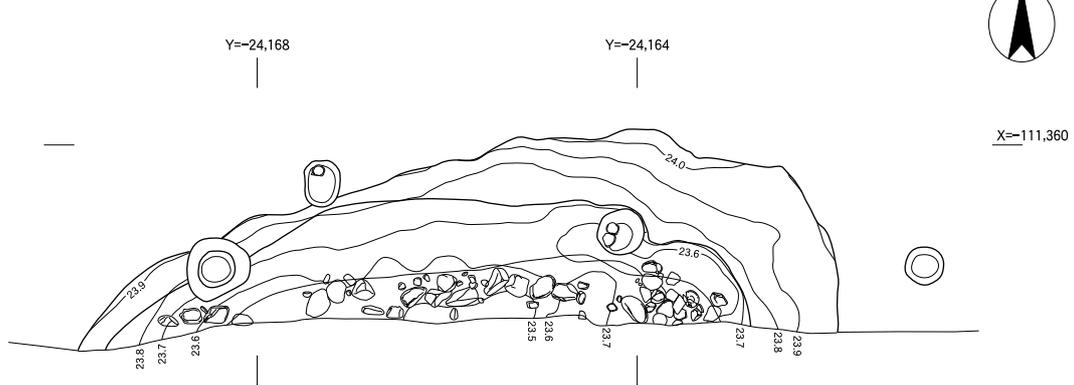
- 柱穴：10YR4/2～4/3 灰黄褐色～こぶい黄褐色砂泥
- 掘形：10YR4/2 灰黄褐色砂泥

図 15 柵 158 実続図 (1 : 80)

池239平面図



池252平面図



調査区南壁断面図 (池239・252周辺)

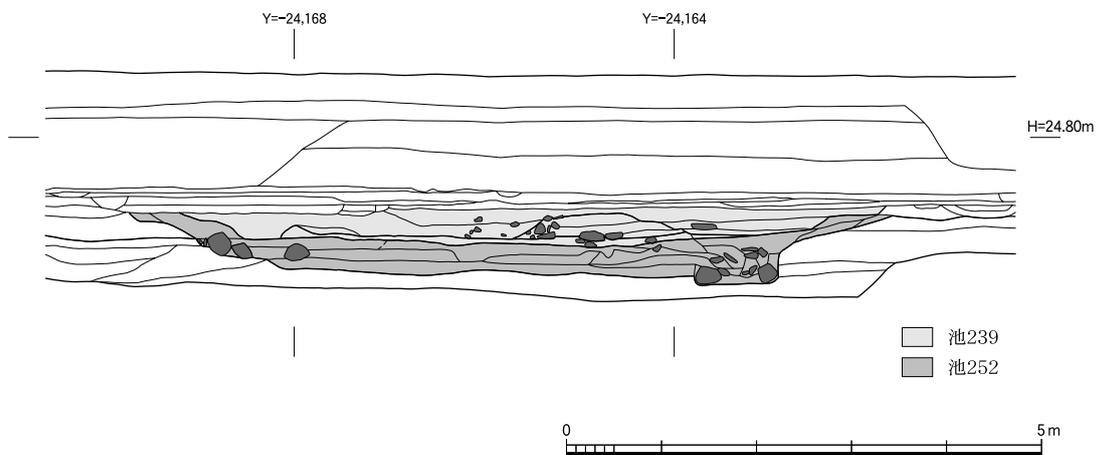


図 16 池 239・池 252 実測図 (1 : 80)

る。チャート、泥岩、砂岩などの石材が使用されている。池の底は平坦で小石を多く含む灰黄褐色砂泥層である。北東から溝250が接合している。京都Ⅱ期中～新段階の遺物を含む。

**溝250** 調査区東部南側で検出した。幅0.5m、深さ0.1m、約2.5m。北東から南西に向かう傾きをもつ。溝197南部から池238の北東部に直線的に接続する。埋土は上層が10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、下層が10YR4/1灰褐色泥砂で、下部には粗砂が堆積する。池239への導水路とみられる。京都Ⅱ期中～新段階の遺物を含む。

## 第2b面 (図13)

東部南側の池239を掘り下げて、池252を検出した。池239と同様に、北岸の一部である。

**池252** 調査区東部南側、池239の下層で検出した。東西7.9m以上、南北2.1m以上、深さ0.6mを確認した。北岸および東岸は二段階の傾斜を持つ。汀は緩やかな傾斜を持つが、途中から急に傾斜がきつくなる。底部は平坦になり、ここに護岸もしくは景石とみられる河原石が南側に面を合わせて、東西方向に並んで15個が据え付けられる。河原石の大きさは0.2～0.4mで、砂岩が主体となりチャート質の石材もみられる。東部には泉とみられる径0.9mの集石部分があり、この地点の下層には、砂礫層に達する窪みが掘られ、数個の石が据え付けられている。この部分から湧水があったとみられる。京都Ⅱ期中段階の遺物を含む。調査終了時に、池はさらに南方と東西に拡がることを確認した。

**柱穴265・266他** 池の北岸付近の位置で柱穴を5基(柱穴263・265～268)検出した。直径0.5～0.6m、深さ0.2～0.3mである。265・266の底部には根石が確認できる。266は池の中に張り出して造られる。柱穴間は不揃いで、柱筋も通らないものがある。造り替えなどがあったとみられるが、建物は復元できなかった。

**整地253** 東部に位置する南北方向の旧流路(流路254)を埋め立てて、大規模な整地を行っている。埋土は10YR4/6褐色泥砂が主体である。この整地層の上に平安時代前期の遺構が成立する。京都Ⅰ期～Ⅱ期中段階の遺物を含む。この整地層からは、土師器碗皿類の破片が3,085片出土している。表面の磨滅が激しく、外面調整の手法が不明な個体が多い。その中で、Ⅰ期に属するケズリ手法によるものは153片を確認した。さらにⅡ期に属するナデ手法によるものは627片を確認している。

**流路254** 平安時代前期の整地253を取り外した面で、東部を北から南に流れる流路254を検出した。東西幅9m以上、深さは1.5m。南ではやや西側に広がる。埋土は10YR3/1黒褐色泥土が主体である。調査区の北端と南端部で部分的に掘り下げた。下層に古墳時代後期の遺物を包含する。

## 註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

古墳時代から近代にわたる各時代の遺物が出土した。遺物は整理箱で70箱あった。その内訳は、土器類・瓦類・木製品・金属製品・石製品・自然遺物などがある。土器類の出土が最も多く、その他は少ない。

古墳時代の土器類には、旧流路や整地層から出土した土師器・須恵器がある。

平安時代の遺物はほとんどが前期に属する。内容は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器・土製品・瓦類・木製品・金属製品・石製品・自然遺物など多種にわたる。

鎌倉時代から室町時代の遺物は少量である。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入銭貨などがある。

江戸時代以降の遺物には、施釉陶器、磁器、瓦などが少量ある。

### (2) 土器類

**溝179出土土器** (図17) 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。土師器、須恵器、緑釉陶器を図示した。京都Ⅱ期中～新段階に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、甕がある。杯(1～4)は口径12.4～16.0cmある。1は高さ2.5cmある。口縁部は外反し端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。3は他に比べて器壁が厚い。高杯(5・6)は5が杯部、6が脚部である。5の杯部は口径24.8cmある。外面はヘラケズリで成形される。脚部はヘラケズリで断面八

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器		須恵器2点		
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、金属製品、木製品、石製品		土師器62点、黒色土器15点、須恵器30点、灰釉陶器13点、緑釉陶器29点、輸入陶磁器6点、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、文字瓦1点、土製品1点、金属製品2点、木製品1点、石製品2点		
室町時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、銭貨		銭貨1点		
江戸時代以降	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦				
合計		85箱	167点(9箱)	48箱	28箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

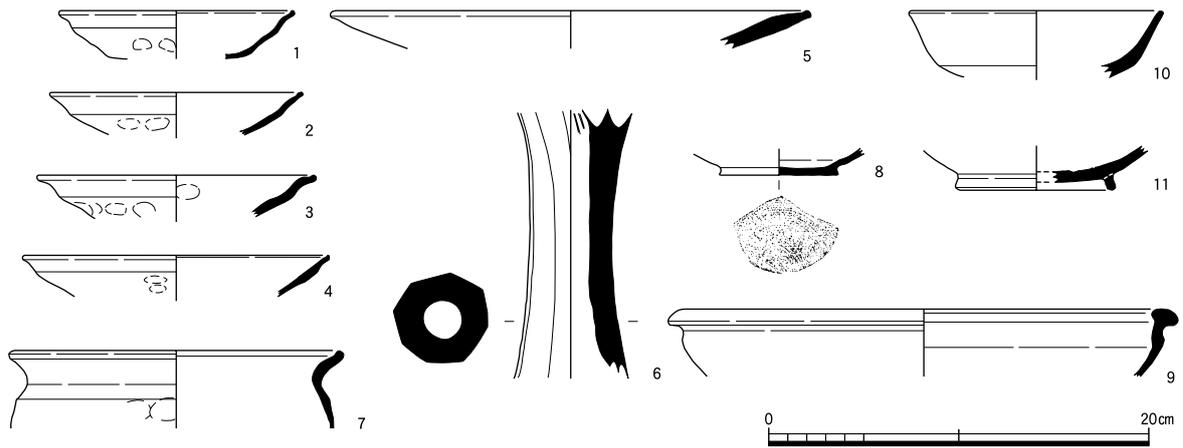


図17 溝179出土土器実測図(1:4)

角形に面取りされる。甕(7)は口縁部の破片で口径17.6cmある。口縁部は外反し、端部は上方に収める。口縁部内外面はナデを施し、体部外面はユビオサエで調整する。

須恵器には杯、鉢、壺、甕がある。杯(8)は底径6.2cmある。内外面ともロクロナデ、底部は糸切り痕を残す。鉢(9)は口径25cm前後あり、端部は外方に肥厚して収める。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀(10・11)のうち、10は口縁部で、口径14.0cmある。体部外面には内側に折れる稜をもつ。内面の口縁端部には部分的に濃い緑釉が掛かる。釉は明緑色を呈し、胎土は浅黄橙色で、焼成は軟質である。周防産とみられる。11は底部で、高台径8.0cmある。内面底部には2条の沈線が施される。貼付けの輪高台である。釉は淡緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系。

**溝196出土土器**(図18) 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦がある。京都Ⅱ期中～新段階に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、甕がある。皿(12)は口径13.5cm、高さ1.0cmで、口縁部は外反して端部は上方に収める。口縁部内外面は横ナデ、内面底部はナデ、底部外面はユビオサエで調整する。杯(13・14)は口径が13.5cmである。ともに口縁部は外反し、口縁部内外面は横ナデ調整。14は端部を上方に収める。体部外面はユビオサエで調整する。高杯(15)は脚部である。ヘラケズリで断面七角形に面取りされる。

黒色土器には椀、鉢、甕がある。甕を図示した。甕(16)は内外面ともに黒色化したB類である。口径18.6cm。外上方に延びる口縁部をもつ。外面にはユビオサエ痕が残る。部分的にヘラミガキを施す。

須恵器には杯、鉢、甕がある。杯(17)は高台が付く杯Bに分類されるものである。高台径9.4cmある。京都Ⅰ期まで遡る。鉢(18)は口径20.0cmある。口縁端部が玉縁状を呈する。

灰釉陶器には椀、皿がある。椀(19・20)はともに口縁部で、19は口径12.6cm、体部は内湾し口縁端部は外反する。20は口径18.6cmと大型で、鉢の可能性もある。皿(21~24)は底部である。22・24は輪高台で、いわゆる三日月高台である。21は底部径4.2cmで、糸切り痕を残す平高台である。23は底部径8.0cmあり、大型のものである。高台が低い。

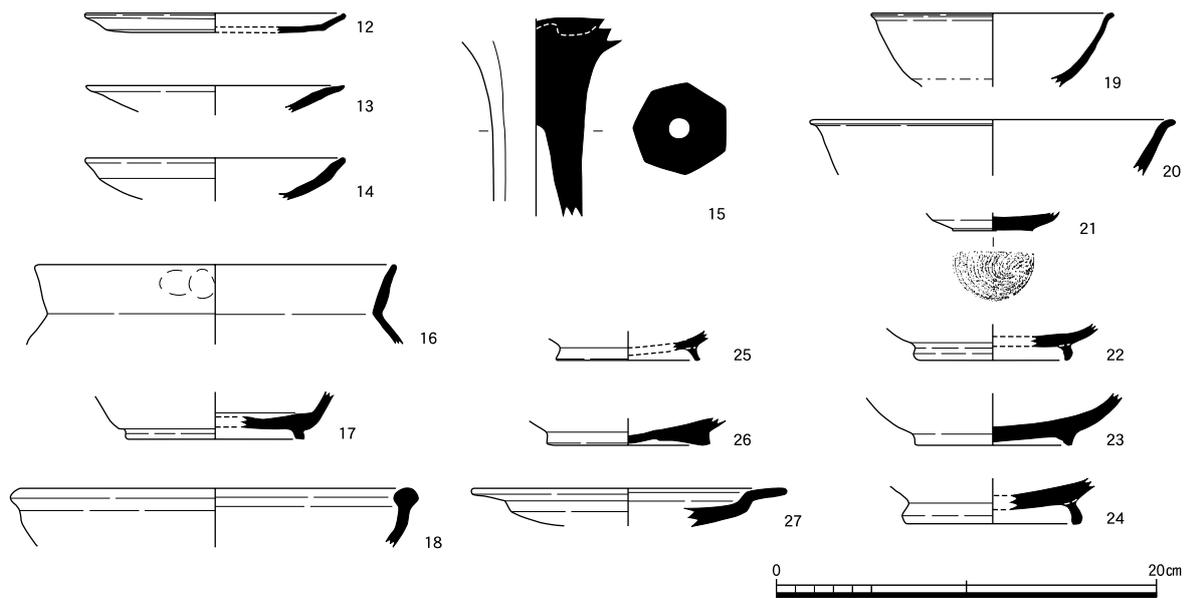


図18 溝196出土土器実測図(1:4)

緑釉陶器には椀、皿がある。皿のみ図示した。皿(25~27)では、25は底径9.6cmで、貼付けの輪高台とする。釉は緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系である。26は底径8.6cmある。削り出して蛇の目高台とする。釉は暗緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。山城系。27は体部から口縁部で、口径は16.4cmあり、口縁部が水平に外側に延びる段皿である。釉は浅黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。山城系。

**埋納土壙174出土土器**(図19、図版3) 土師器がある。京都Ⅱ期中段階に属する。

土師器には皿、椀、杯がある。皿(34~39)は口径14.2~14.5cm、高さ2cm前後で、口縁部は外反して端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。椀(28~32)は口径13.3~14.4cm、高さ3cm前後あり、口縁部は外反し端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。口縁端部に

ススが付着するものが数点見られる。

**土壙141出土土器**(図20、図版3)

土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦がある。京都Ⅱ期中~新段階に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、鉢、甕がある。皿(40)は口径15.5cm、高さ1.5cmで、口縁部は外反して端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。底部外面はユビオサエの後ナデを施す。杯(41~45)は口径13.5~18.0cm、高さ2.5cm前後あり、大きさは3種に分けられる。口縁部は

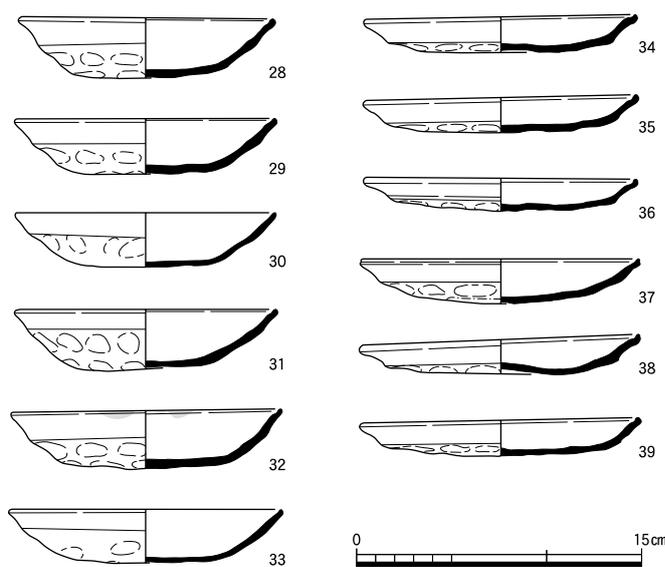


図19 埋納土壙174出土土器実測図(1:4)

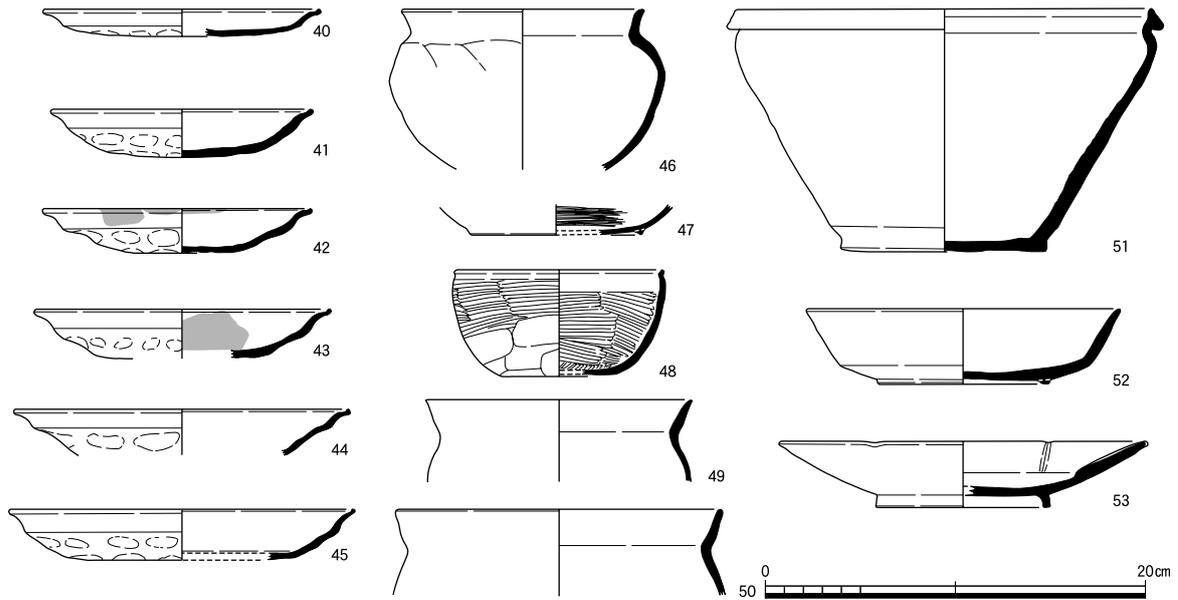


図20 土壙141出土土器実測図(1:4)

外反し端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。底部外面はユビオサエの後ナデを施す。甕(46)は小型で、外反する口縁部をもつ。口径12.6cmで、体部外面はユビオサエの後、横方向にナデる。

黒色土器には椀、鉢、甕がある。椀(47)は高台径9.0cm。退化した高台が付く。内面は横にヘラミガキする。内面を黒色化したA類である。鉢(48)は口径10.8cmあり、内湾する体部をもち、口頸部は直立し端部はやや外反する。内面は横にヘラミガキする。口縁部は横ナデ。外面上半は横にヘラミガキ。下半はヘラケズリ。A類。甕(49・50)は内面を黒色化したA類である。口径13.9cm、16.9cm。ともに外上方に延びる口縁部をもつ。内外面ともにナデ調整。

須恵器には杯、鉢、甕がある。鉢(51)は口径21.8cm、器高は12.9cm、底径10.8cmある。口縁端部は外方に肥厚して収める。焼成は軟質である。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀(52)は口径16.4cm、高さ4.0cm、底径8.9cmある。体部下半に陵が付く。貼付けの輪高台。釉色は浅黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。胎土の中央部が黒ずむ。周防産である。皿(53)は口径19.2cm、高さ3.5cm、底径9.1cmある。輪花段皿である。底部は貼付けの輪高台とする。釉はオリーブ黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系。

**土取り跡232出土土器**(図21、図版4) 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅱ期中段階の新相に属する。

土師器には皿、杯、高杯、鉢、甕がある。皿(54・55)のうち54は口径13.1cm、高さ1.7cmある。55は口径14.9cm、高さ1.8cm前後である。ともに口縁部は外反して端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。底部外面はユビオサエの後ナデを施す。54は器壁が厚い。黄灰色を呈し、雲母を含む。杯(56~58)は56が口径15.0cm、高さ2.1cmあり、口縁部の外反はゆるい。内面から口縁部外面までナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。57は口径15cm前後あり、口縁部は強く外反する。58は底部に退化した高台を貼り付ける。内面から口縁部外面ま

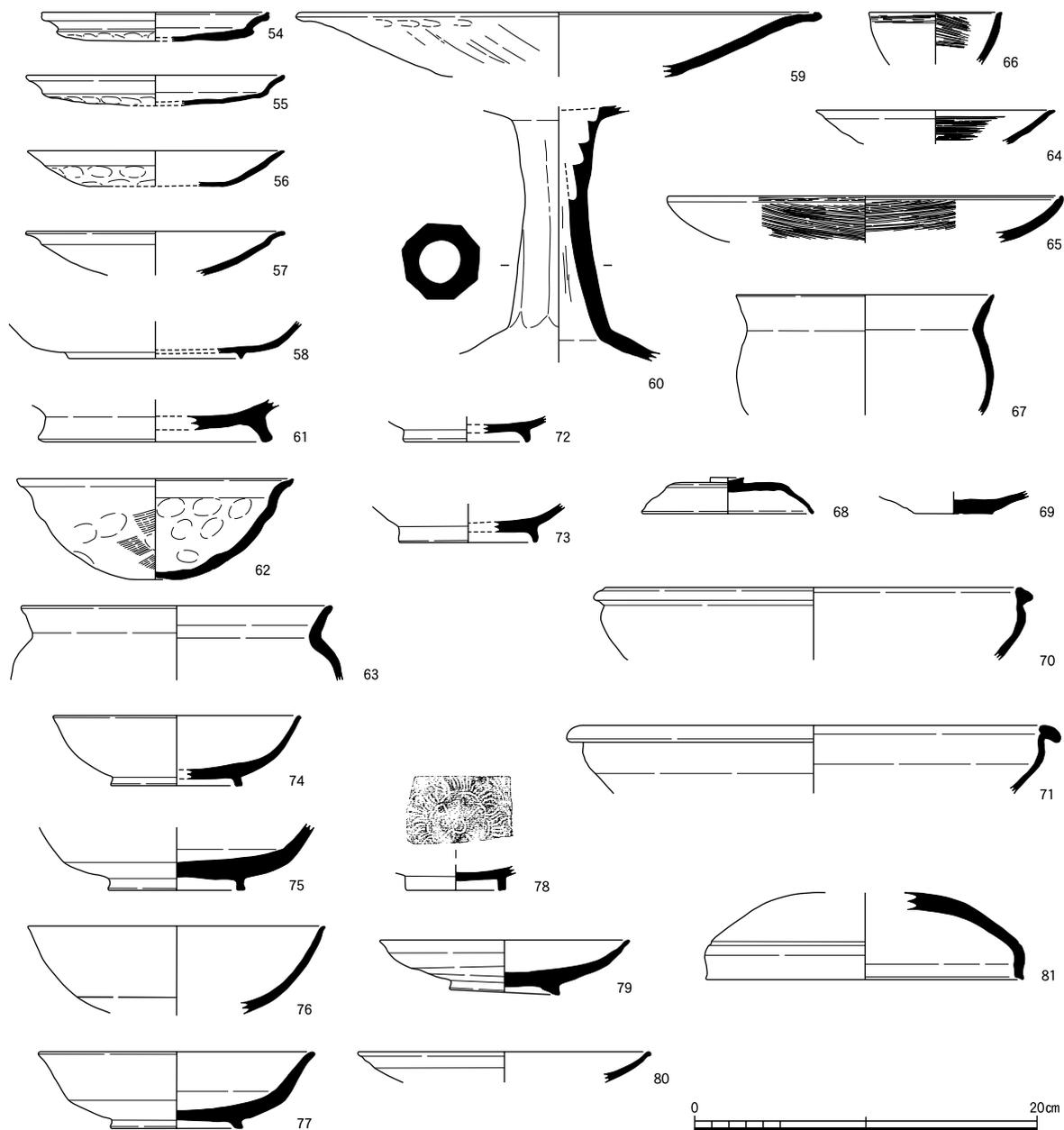


図21 土取り跡 232 出土土器実測図 (1 : 4)

でナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。高杯 (59・60) は杯部と脚部である。横に拡がる杯部をもつ。杯部外面はヘラミガキ調整、脚部はヘラケズリされ、断面八角形に面取りされる。盤 (61) は底部にハ字状に外側に開く高台を貼り付ける。内面はケズリ後に横ナデを施す。鉢 (62) は口径16.0cmあり、口縁部は短く外反して端部は上方に収める。内面はユビオサエ、口縁部は横ナデ、外面はユビオサエの後タタキを施す。器壁は厚い。甕 (63) は小型で、外反する口縁部をもつ。口径18.0cmで、体部内外面は横方向のナデ調整を行う。

黒色土器には皿、椀、鉢、甕がある。椀 (64) は口径13.8cm、外面はオサエの後ナデ調整、内面は丁寧に横にヘラミガキする。口縁端部内側には沈線がある。内外面ともに黒色化したB類である。盤 (65) は口径23.0cmと大型である。口縁端部内側には沈線がある。内外面はともに丁寧

にヘラミガキを施す。内外面ともに黒色化したB類である。鉢（66）は口径7.7cmあり、口頸部は直立し、端部は内側に傾斜し、面をもつ。内面から口縁部はともに丁寧にヘラミガキを施す。外面はオサエの後ナデを施す。内面のみ黒色化したA類である。甕（67）は口径15cm前後。外上方に延びる口縁部をもつ。口縁部内外面は横ナデを施すが、体部は磨滅のため調整は不明である。内面を黒色化したA類である。

須恵器には杯蓋、杯、鉢、瓶、壺、甕がある。杯蓋（68）は中央がやや窪むつまみをもつもので、口径は9.9cmある。京都I期まで遡る。杯（69）は底部付近で、内外面とも回転ナデで調整する。平高台とする。糸切り痕が残る。鉢（70・71）は70が口径24.0cmある。口縁端部は外方に肥厚して収める。焼成は軟質である。71は口径27cm前後ある。口縁端部が玉縁状を呈する。

灰釉陶器には椀、皿、壺がある。皿（72）、椀（73）はともに底部である。72は底部径7.2cmある。73は底部径8.0cmである。ともに貼付け高台である。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀（74～77）では74のみ全形がわかり、口径14.2cm、高さ4.1cmある。口縁端部は外方につまみ出す。貼付けの輪高台。釉は淡緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。尾張産。75は底部で、体部に陵が付く。貼付けの輪高台。釉はオリーブ灰を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系。76は口縁部で口径17.2cmある。丁寧にヘラミガキを施す。釉は灰白色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。山城系。77は貼付けの輪高台で、体部に陵が付く。釉は灰オリーブ色を呈し、胎土は浅黄橙色で、焼成は軟質である。周防産である。皿（78～80）は79のみ全形がわかり、口径14.4cm、高さ3.1cmある。底部は削り出して蛇の目高台とする。釉は薄く掛かり緑灰色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。山城系。78は内面底部に陰刻花文を施す。貼付け高台で、釉は緑色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。東海系である。80は口縁部である。体部外面は回転ヘラケズリ。釉はオリーブ黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系。

輸入陶磁器には黄釉合子蓋がある。黄釉合子蓋（81）は口径18.4cmある。高さ5.1cmある。体部と口縁部の境には凹線がある。口縁端部は下に面があり、釉はふき取る。にぶい黄色の釉が掛かる。胎土は精緻で灰黄色である。

**池239出土土器**（図22） 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類がある。京都II期中段階の新相に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、鉢、甕がある。皿（82～84）は口径14.0～14.5cm、高さ1.6cm前後で、口縁部は外反して端部は上方に収める。口縁部は横ナデし、底部外面にはユビオサエの跡が残る。杯（85・86）は、85が口径12.8cm、86が14.6cmある。口縁部は外反し端部は上方に収める。口縁部は横ナデし、体部下半にはユビオサエの跡が残る。高杯（87・88）は杯部と脚部である。87の杯部は径27.5cmあり、端部は上方に丸く収める。破片内にはヘラケズリはみられない。88の脚部はヘラで面取りされるが、断面は円形化しつつある。

黒色土器には椀、鉢、甕がある。椀（89～91）は90・91に高台が付く。高台径7.8cmある。89の口径は19.5cmである。ともに外面はナデ調整、内面は横にヘラミガキする。内面を黒色化したA類である。鉢（92）は口径21.0cmあり、直立する体部をもち、端部は丸く収める。外面はナデ

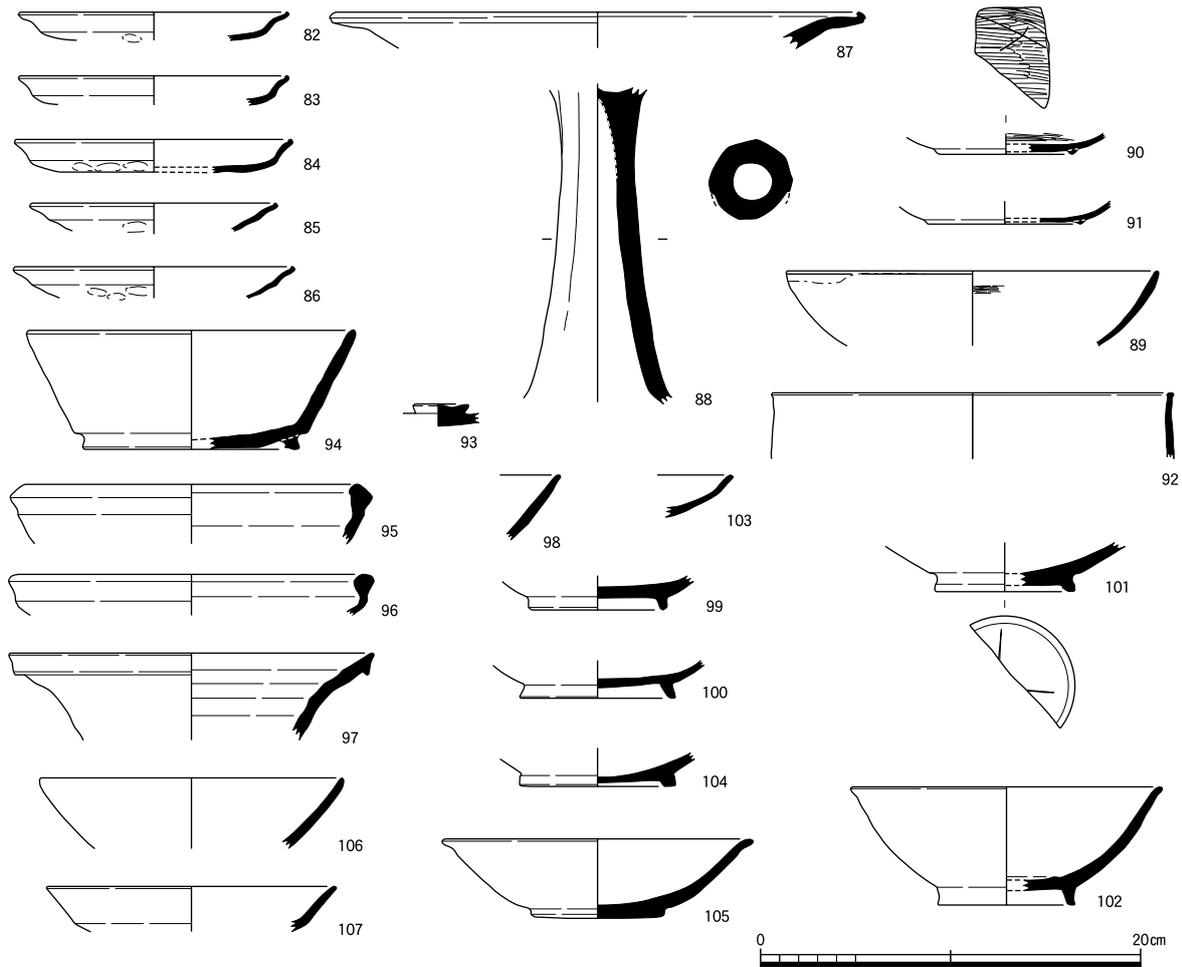


図22 池239出土土器実測図(1:4)

調整、内面は横にヘラミガキする。A類。

須恵器には杯蓋、杯、鉢がある。杯蓋(93)のつまみ上面は、やや窪み中央部のみが突出する。杯(94)は口径17.1cm、器高6.3cmある。外上方に直線的に開く体部をもつ。体部と底部の境は斜めにケズリ、輪高台を貼り付ける。東海系とみられる。鉢(95・96)のうち95は口径17.4cmある。端部は外方に肥厚して収める。焼成は軟質である。96は口径18.2cm前後ある。口縁端部は玉縁状を呈する。焼成は硬質である。壺(97)は口縁部で、口径19.0cmある。口縁部は大きく外反し、端部は外側に平坦面をもつ。

灰釉陶器には椀、皿がある。椀(98)は口縁部であるが、小片のため口径は不明である。口縁端部はやや外反する。内外面とも回転ナデを施す。皿(99)は底部である。底部径6.9cmあり、貼付け高台である。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀(100~102)は102が全形がわかり、口径16.2cm、高さ6.3cmある。体部はやや内湾し、口縁部は緩く外反する。貼付けの輪高台である。釉は浅黄緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。周防産とみられる。100・101は底部で、100は底径8.0cmある。内面底部には小さい目跡が残る。釉はにぶい緑色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。貼付けの輪高台である。東海系。101は底径7.2cmある。釉はにぶい緑色を呈し、胎土は

灰白色で、焼成は硬質である。削出し高台で、高台内には線刻がある。山城系である。皿（103～105）のうち105のみ全形がわかる。口径16.0cm、高さ6.6cmある。口縁部は緩やかに外反し、底部は削出し高台とする。釉は浅黄緑色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。山城系。103は口縁部である。釉は灰オリーブ色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。東海系。104は底径が8.0cmある。削出し高台である。釉は浅緑色を呈し、胎土は浅黄橙色で、焼成は軟質である。山城系。

輸入陶磁器には青磁の椀、皿がある。椀（106）は口径15.9cmある。体部はやや内湾して上方に延びる。オリーブ灰色の釉。越州窯産。皿（107）は口縁部で口径15.0cmある。体部と口縁部の境に稜がある。オリーブ黄色の釉が掛かる。越州窯産。

池252出土土器（図23、図版4） 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類がある。京都Ⅱ期中段階に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、鉢、甕がある。皿（108）は口径14.0cm、高さ1.6cmで、口縁部は外反して端部は上方に収める。口縁部は横ナデし、底部外面にはユビオサエの跡が残る。杯（109～113）は3種類の大きさがある。109が口径13.5cm、高さ2.0cmある。110～112は口径14.5～15.0cm、高さ2.4～3.0cmある。113は口径16.5cm、高さ3.0cmある。ともに口縁部は外反し

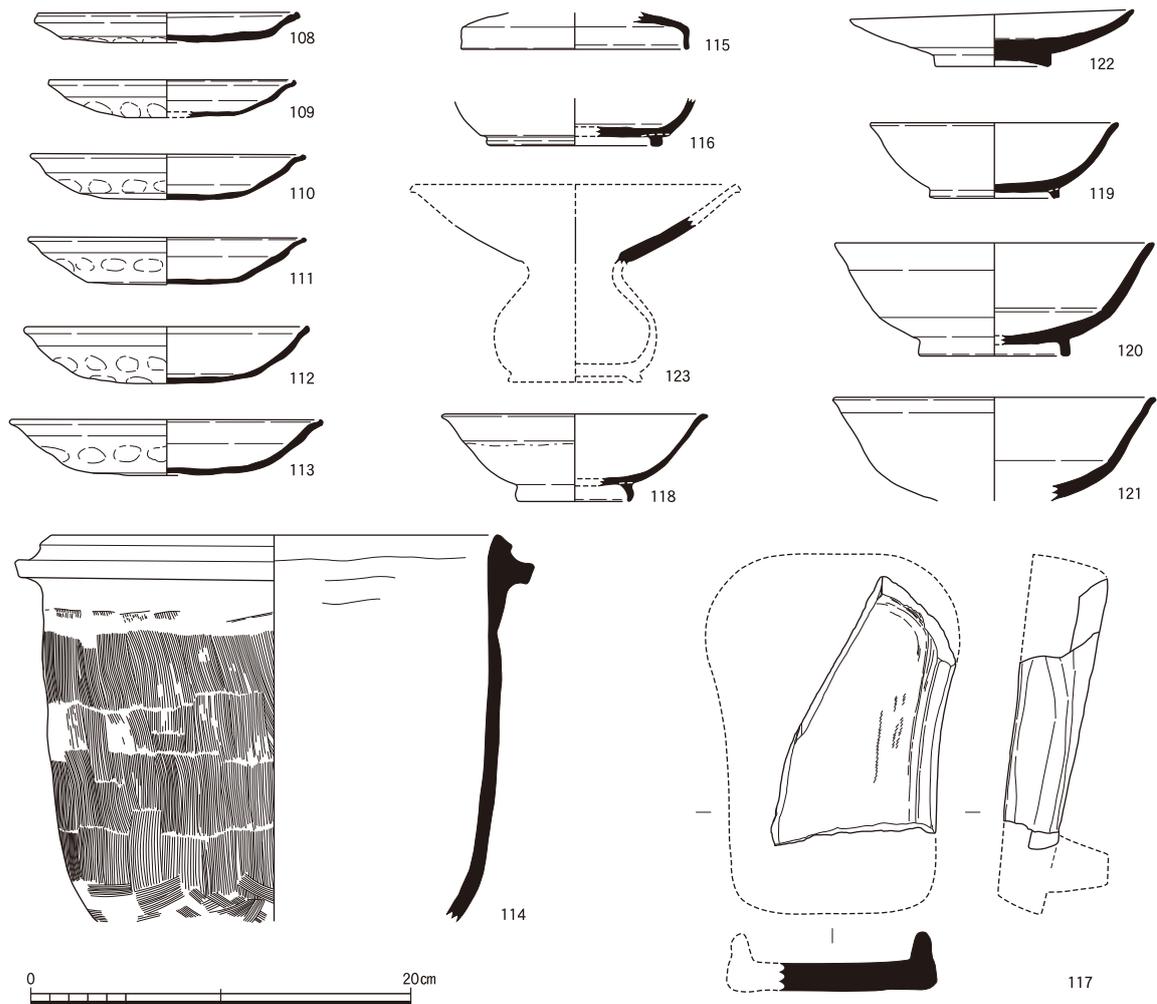


図23 池252出土土器実測図（1：4）

端部は上方に収める。口縁部は横ナデし、底部外面にはユビオサエの跡が残る。羽釜（114）は口径23.4cm、残存高は20.4cmある。口縁端部をやや下がった位置に鐔が付く。外面は粗いタテハケ、内面にはナデ調整を施す。外面にはススが付着する。鐔を貼り付けた後、口縁部を横ナデ調整する。摂津地方の製品とみられる。

須恵器には杯蓋、壺蓋、杯、鉢、壺、甕、硯がある。壺蓋（115）は口径12.0cm、残存高は1.9cmある。天井部が高い。京都Ⅰ期まで遡る。杯（116）は底部で、高台径9.0cmある。貼付けの輪高台が付く。体部はやや内湾する。焼成は硬質である。風字硯（117）は粘土板の縁を上方に折り曲げて堤部とする。堤部と脚部の接合部がみられる。陸部には著しい擦痕が見られ、墨が付着している。焼成は硬質である。

灰釉陶器には椀、皿がある。椀（118）は全形がわかり、口径が14.0cm、高さ4.6cm、底部径6.0cmである。口縁端部は外反する。いわゆる貼付けの三日月高台である。

緑釉陶器には椀、皿、唾壺がある。椀（119～121）は、119が口径13.0cm、高さ4.0cmある。貼付けの輪高台で、下端面が内傾し、凹線状に窪む。釉はオリーブ黒色を呈し、胎土はにぶい黄橙色で、焼成はやや軟質である。近江系とみられる。120は口径16.8cm、高さ6.0cmある。体部下半の内面に沈線がみられる。貼付けの輪高台である。釉はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。東海系。121は体部で、口径17.0cmある。内面に沈線が施される。釉は灰オリーブ色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。東海系。皿（122）は全形がわかる。口径15.0cm、高さ3.0cmある。底径は6.0cm。底部は削り出して蛇の目高台とする。外面の端部付近に沈線が施される。釉はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。山城系。123は唾壺の頸部である。丁寧なミガキが施される。釉は厚く、オリーブ灰色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。山城系。

**整地253出土土器**（図24、図版3） 土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦がある。京都Ⅱ期中段階に属する。

土師器には椀、皿、杯、高杯、鉢、甕がある。椀（124・125）は124が口径12.2cm、高さ2.6cmである。外面はヘラケズリされる。125は口径13.4cmである。外面上部はヘラケズリされ、下半にはユビオサエの後ナデを施す。京都Ⅰ期新に属する個体である。皿（126・127）のうち126は口径13.2cm、高さ1.8cm、127は口径14.8cm、高さ1.6cmある。外面はヘラケズリされる。京都Ⅰ期新に属する個体である。杯（128～130）のうち130は口径14.0cm、128は口径13cm前後、129は口径15cm前後ある。口縁部は外反し端部は上方に収める。内面から口縁部外面までナデ調整。体部外面はユビオサエの後ナデを施す。京都Ⅱ期中に属する個体である。台付き鉢（131）は口径30.0cm、高さ11.4cm、底径24.4cmである。底部はやや下方にふくらみ、体部から口縁部は外反し、口縁端部は上方に丸く収める。高台は高く、外側に拡がり、幹部は丸く収める。全体にナデを施す。

黒色土器には椀、鉢、甕がある。椀（132）は口径17.8cm、高さ5.2cmである。内外面ともナデを施す。内面を黒色化したA類である。甕（133）は内面を黒色化したA類である。口径11.6cmである。外上方に延びる口縁部をもつ。口縁部内面には一部ミガキが残る。

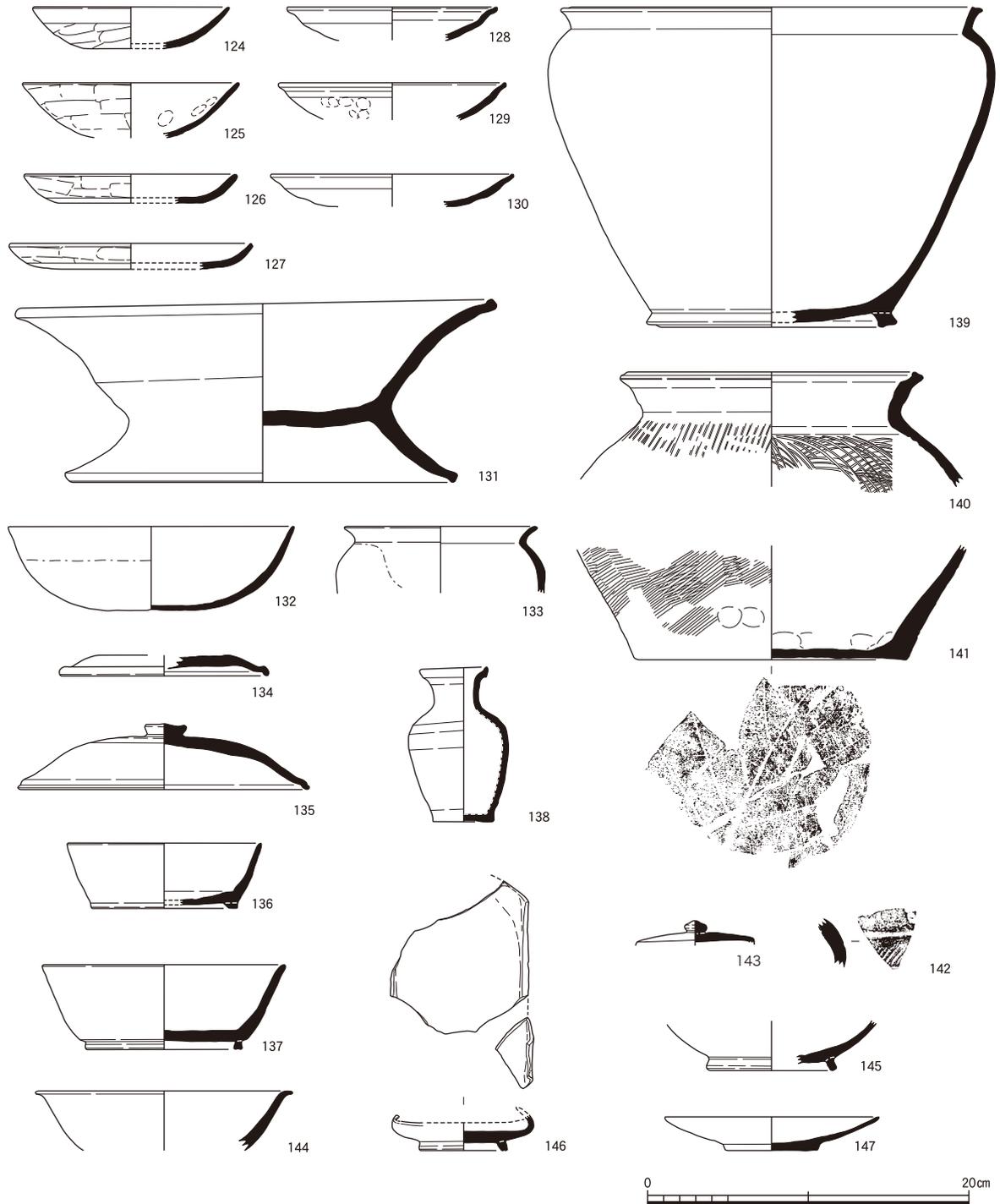


図 24 整地 253 出土土器実測図 (1 : 4)

須恵器には杯蓋、杯、鉢、瓶、壺、甕がある。杯蓋 (134・135) は134が口径12.6cmある。つまみの痕跡が認められるが形は不明である。135は口径18.1cmある。つまみをもつもので、京都 I 期まで遡る。杯 (136・137) のうち136は口径12.0cm、高さ4.1cmである。137は口径15.0cm、高さ5.3cmである。瓶 (138) は瓶子と呼ばれる小壺である。口径4.0cm、高さ9.7cmである。体部外面はヘラケズリを施し、底部は糸切りである。完形品。鉢 (139) は口径25.0cm、高さ20.0cmである。短く立ち上がる口縁部をもつ。外側に開く高台が付く。焼成は硬質である。甕 (140・

141)は140が口径17.8cmある。口縁部は外反する。体部外面は平行タタキを施す。体部内面は同心円文。141は底径16.7cmある。内面の底部はユビオサエ、体部はナデを施す。外面の体部は平行タタキを施す。底部には木葉痕が鮮明に付く。壺(142)は内面が回転ナデ、外面は烈点文と凹線を施す。磨滅が激しい。古墳時代。

灰釉陶器には椀、皿、蓋がある。蓋(143)は端部を欠くが口径7cm前後である。天井部には中央部が突出するつまみが付く。椀(144)は口縁部のみで、口径は16.0cmある。端部は外反する。

緑釉陶器には椀、皿がある。椀(145)は底径8.6cmある。貼付けの輪高台。底部内面に沈線がある。丁寧なミガキを施す。釉色は浅黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は硬質である。東海系である。耳皿(146)は口縁部を指で波状に変形させる。底部には貼付けの高台が付く。内面には丁寧なミガキを施す。釉は緑色を呈し、胎土は灰色で、焼成は硬質である。東海系である。皿(147)は口径13.4cm、高さ2.1cm、底径5.8cmある。底部は削り出して平高台とする。釉は黄緑色を呈し、胎土は浅黄橙色から暗灰色で、焼成は軟質である。磨滅が激しく釉はほとんど剥離する。山城系。

**その他の遺構出土土器**(図25・26、図版4) 須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器、土製品がある。

緑釉陶器椀(148)は底径4.6cmある。底部に糸切り痕が残る。釉は浅黄色を呈し、胎土は灰白色で、焼成は軟質である。山城系。柱穴148から出土した。

須恵器瓶(149)は、瓶子と呼ばれる小壺である。口頸部を欠く。底径3.6cmである。体部外面は回転ナデを施し、底部は糸切りである。柱穴228から出土した。

須恵器壺(150)は口頸部で、口径10.2cmある。口縁部は外反し、端部は外側に平坦面をもつ。柱穴197から出土。

円面硯(151)は硯上半の一部で堤部と海部片である。陸部と脚部が欠損しており、脚部の装飾は不明である。焼成はやや軟質。整地層から出土した。

土馬(152)は両前肢と右後肢を欠く。手づくね成形で四肢等を引き出している。淡い橙色を呈し、精緻な胎土である。土取り跡233から出土。

黄釉褐彩貼花文水注(154~156)は体

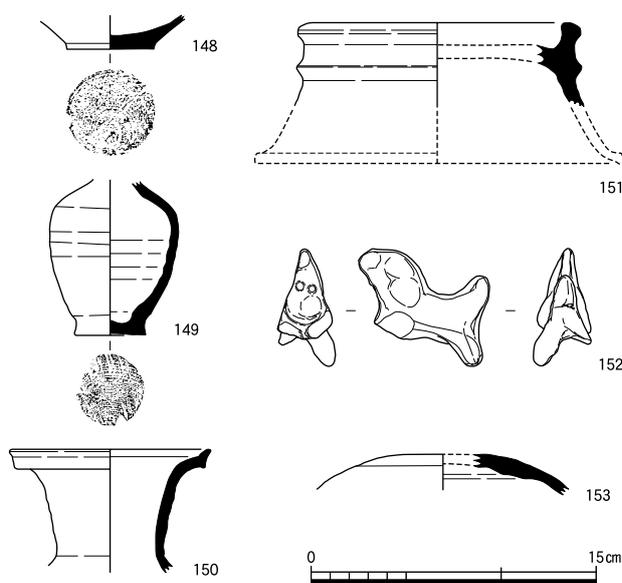


図25 その他の遺構出土土器実測図(1:4)

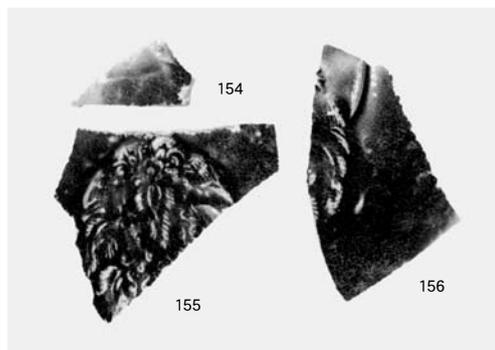


図26 黄釉褐彩貼花文水注

部片である。白化粧を施した素地に黄釉が掛かり、貼花文の装飾部分に褐釉が掛かる。胎土は灰黄褐色を呈する。長沙窯系。土取り跡180から出土した。

須恵器杯蓋（153）は、杯蓋の天井部片とみられる。全体に磨滅が激しいが、外面にはヘラケズリの跡が確認できる。6世紀に属する。底部の可能性もある。流路254下層から出土した。

### （3）瓦類（図27、図版4）

今回の調査では、瓦類の出土は少量であった。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のほか鬼瓦がある。時期別には平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代のものがあるが、ほとんどが平安時代前期に属し、池からの出土が多い。

単弁蓮華文軒丸瓦（157）は中房界線内に蓮子あり。蓮弁は単弁で、不規則に撥状の間弁が配される。外区の界線外には珠文が密に配される。周縁はやや幅広い。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部上面はタテケズリ、裏面はタテナデ調整。胎土は砂粒を含み浅黄橙色を呈し、焼成は軟質。池252から出土した。

単弁蓮華文軒丸瓦（158）は中房界線内に蓮子あり。蓮弁は単弁で、不規則に撥状の間弁が配される。外区の界線外には珠文が密に配される。胎土は砂粒を含み灰白色を呈し、焼成は軟質。池239から出土した。

単弁蓮華文軒丸瓦（159）は蓮弁がハート形で、間弁がある。中房界線はない。外区界線外は小振りな珠文を密に配する。瓦当裏面はケズリ。胎土は砂粒を含み灰白色を呈し、焼成は軟質。整地層から出土した。

唐草文軒平瓦（160）は、外行する唐草文が3回反転するとみられる。唐草は3重となる。外区には珠文をまばらに配する。平瓦部凹面は布目が残る。凸面は縦方向のヘラケズリ。ベンガラが付着する。胎土は砂粒を含み灰黄色を呈し、焼成は良好。池239から出土した。

文字瓦（161）は平瓦凹面に「木」字を押印する。凹面には布目、凸面には縄目タタキがある。胎土は砂粒を含み灰白色を呈し、焼成は良好。文字は「木工」とみられる。洛北産。整地層から出土した。

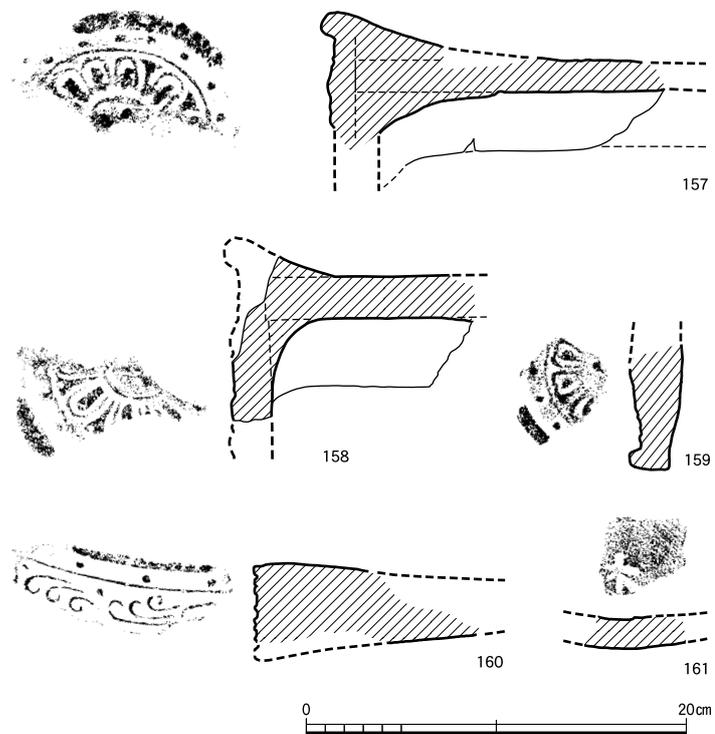


図27 出土瓦拓影・実測図（1：4）

#### (4) その他の遺物 (図 28・29)

木製品、石製品、金属製品、銭貨がある。石製品には罽帯、砥石、加工した凝灰岩がある。木製品には漆器、櫛がある。金属製品には金具類がある。ほとんどが平安時代に属する。

木製櫛 (162) は横櫛である。現存幅7.4cm、高さ3.8cm、厚さ0.8cmある。歯は部分的に欠損、背は直線的で、側縁は垂下する。表面の加工や装飾は不明である。池252から出土。

石製罽帯 (163) は丸軀で、幅4.0cm (残存)、高さ2.8cm、厚さ0.8cmある。やや緑かった乳

白色の石材を用い表面の研磨は丁寧で、光沢を帯びる。裏面には、縦方向に断面U字状の潜り穴が2箇所穿たれる。池252から出土。

砥石 (164) は残存部が長径5.8cm、短径5.2cm、高さ4.7cmある。上面・側面の三方向の面が残存する。上面は使用のためにすり減り端部が高く残る。石材は凝灰質流紋岩である。池252から出土。

金具 (165) は頭部が環状を成す。表面の一部に金が付着しているため鍍金製とみられる。池252から出土。

飾り金具 (166) は表面の剥離が激しいため文様は不明である。中央部に円孔を穿つ。鍍銀製とみられる。釘隠の可能性ある。池252から出土。

銭貨 (167) は北宋銭の元豊通寶である。周縁部には湯道の枝から取り外した際の痕跡がみられる。東端部の床土層から出土した。

自然遺物 (表4、図30) 池252からセンダン核・ニヨウマツ球果・モモ核が検出されており、それぞれ池の周囲に植栽されていたとみられる。他にキンポウゲ属果実・イボクサ果実・ホタルイ属果実などが検出されており、水辺には、これらが生育していたとみられる。また、特にシソ科の果実が最も多く検出されたことが注目される。

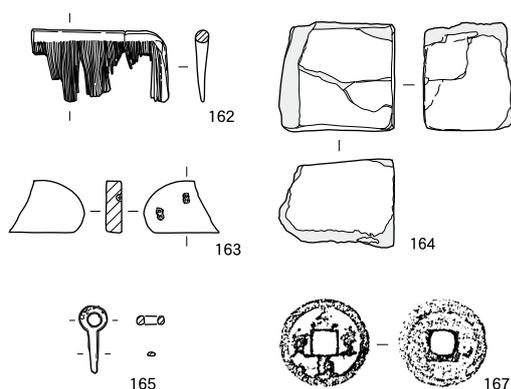


図 28 その他の遺物実測図 (1:4)、  
銭貨拓影 (1:2)

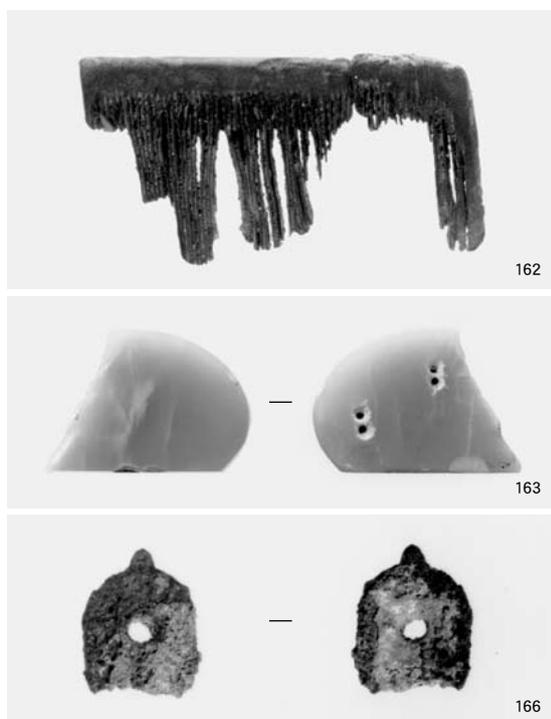


図 29 その他の遺物

表4 池252 検出自然遺物一覧表

## 木本

番号	和名	部位	科名	個数	生息場所
1	二葉マツ	球果	マツ	14	山野・海岸・植林
2	スダジイ	果実	ブナ	2	山地・庭
3	ヒメグルミ	果実	クルミ	1	山野・海岸・植林
4	カジノキ	果実	クワ	8	山野・栽培
6	クワ科	果実	クワ	1	山地
6	サクラ属	核	バラ	5	山地
7	ウメ	核	バラ	5	庭・畑
8	スモモ	核	バラ	2	庭・畑
9	モモ	核	バラ	13	庭・畑
10	キイチゴ属	核	バラ	5	山野
11	フユイチゴ	核	バラ	121	山地
12	センダン	核	センダン	87	山地・人家
13	アカメガシワ	果実	トウダイグサ	1	山野

## 草本

番号	和名	部位	科名	個数	生息場所
14	タデ属 (三稜形)	果実	タデ	50	原野・湿地・水辺
15	タデ属 (扁平形)	果実	タデ	2	原野・湿地・水辺
16	アカザ属	種子	アカザ	19	荒地
17	ヒユ属	種子	ヒユ	33	畑・道端
18	イノコズチ	花被	ヒユ	1	山野・道端
19	ハコベ属	種子	ナデシコ	29	道端・野原
20	ザクロソウ	種子	ナデシコ	21	道端・畑
21	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	73	荒地・田の間
22	スベリヒユ	種子	ナデシコ	17	日なたのいたる所
23	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	112	湿地・山野
24	タガラシ	果実	キンポウゲ	18	田・溝
25	アブラナ科	種子	アブラナ	4	田・畑・湿地・山野
26	ヘビイチゴ属	核	バラ	7	原野・道端・藪
27	エノキグサ	種子	トウダイグサ	63	道端・畑
28	カタバミ属	種子	カタバミ	56	庭・道端
29	スマレ属	種子	スマレ	2	山野・道端・湿った所
30	セリ科	果実	セリ	1	山野・湿った所
31	チドメグサ属	果実	セリ	19	野原・人家・庭園
32	シソ科	果実	シソ	145	畑・山野
33	メハジキ	果実	シソ	5	野原・道端
34	ナス科	種子	ナス	61	山地・畑・道端
35	タカサブロウ	果実	キク	24	道端・田の畦道
36	メナモミ	果実	キク	2	山野
37	ホタルイ属	果実	イネ	18	湿地・沼・池
38	イネ科	穎	イネ	3	道端・野原
39	イボクサ	種子	ツユクサ	81	水田・沼地
40	ミズアオイ	種子	ミズアオイ	1	水田・沼
41	コナギ	種子	ミズアオイ	1	水田・沼

## その他

番号	和名	部位	科名	個数
42	不明			25~30
43	昆虫	頭部		8
44	昆虫	胸・腹部		34
45	昆虫	脚部		7
46	昆虫	翅部		11
47	蛾	繭		1
48	葉			

※ 池252の土壌サンプルは約44リットルを4・2・1mmの篩いで洗浄し、2mmの篩いまではすべて選別・同定し、1mmの篩いのは約9リットル分を選別・同定した。

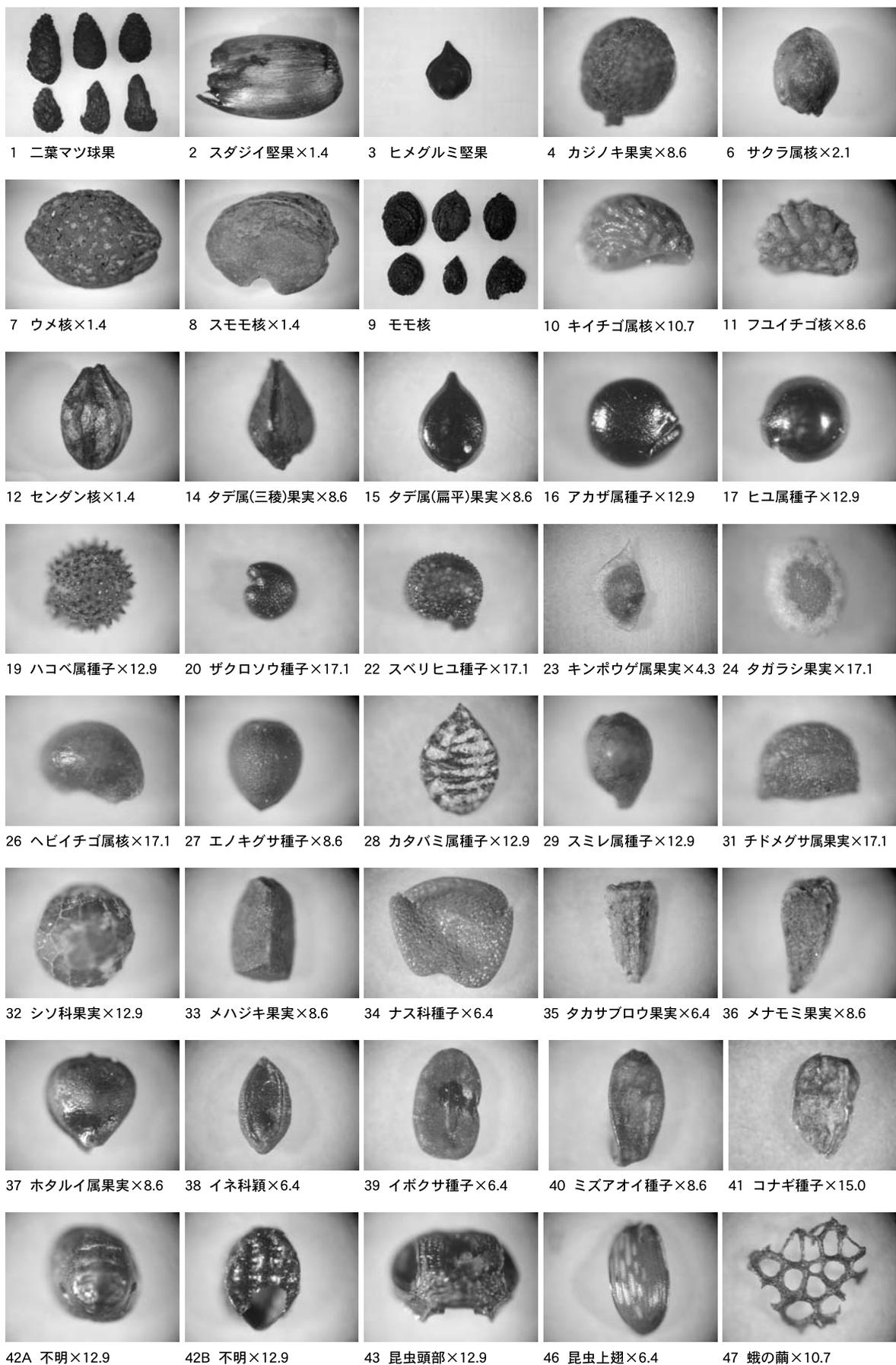


図 30 池 252 検出自然遺物

## 4. ま と め

今回の調査地は、平安京右京六条二坊三町内にあたり、敷地の北側約25mに六条坊門小路、東約60mに西大宮大路、西約15mに西靱負小路が推定される地点で、三町のなかでは中央やや北西寄りに位置する。このため平安京の条坊に直接関連する遺構は対象とならず、三町内の宅地内の利用状況を明らかにすることが目的であった。今回の調査により当地の変遷の概略を知ることができた。以下では、その成果を簡単にまとめた。

### (1) 三町周辺の変遷

既に述べた通り、調査で検出した遺構・遺物は、古墳時代・平安時代前期・室町時代以降の3期にまとめられる。

古墳時代には、調査区東部に南北方向の流路がある。出土した遺物は、土師器・須恵器などがあり、表面が激しく磨滅しているものが含まれる割合が多いことから、上流の遺跡から流れてきたものとみられる。遺構・遺物の密度が低く、積極的な土地利用の痕跡は確認されておらず、周辺調査の流路や湿地などの分布状況から見ても、ほとんど未開発の自然地形であったとみられる。

平安時代には、初期に属する遺構はなく、遺物も整地層から表面剥離の激しいものが少量しか出土していないことから、平安京造営当初には、当地はまだ宅地化されていなかったとみられる。

当地が宅地としての土地利用がなされたのは、9世紀後半にはいつ頃からとみられる。この時点で古墳時代の流路254を埋め立てて宅地化がなされている。当期の遺構には、新旧2時期の池や柱穴群さらに町の中心部に位置する南北溝などがある。旧期の池（池252）は三町の中央付近に位置していることから、1町規模をもつ宅地の可能性も考えられる。池252が廃絶した後は、新たに池239が東西幅を減少して造られている。この時期には三町の中心部に南北溝196が造られており、三町を東西に分割していると考えられる。また、大規模な土取り跡180・232などには、9世紀後半の遺物が多量に廃棄されていることから、この地の開発がこの時期であることが裏付けられる。

平安京の造営を契機として旧流路などの自然地形が埋め立てられて宅地化していく過程が、一坊十一町・十四町などで実施した調査で明らかとなっている。また、京内の整備が平安京造営当初からの地域と、今回のようにしばらくしてから実施される地域があることもわかってきた。

また、当地では、9世紀末頃には早くも池や南北溝などが廃絶していることがわかった。この時期に廃絶する遺構が多いことは、周辺の調査結果でも確認されており、この地域に共通する様相として認識できる。地域により多少の時期差はあるが、平安京の右京域が遷都後の比較的早い段階で衰退していったことを示す事例の一つである。当地の平安時代中期以降は、室町時代までの遺構や遺物の検出が少ないことから、この時期は居住域ではなかったとみられる。

室町時代以降は、近代まで耕作地としての利用がなされていた。当地周辺の右京域に共通する状況が今回も確認された。

## (2) 池について

今回の調査では、平安時代前期の新旧2時期の園池を検出した。池252が古く、東部に水源となる泉をもつ。汀はなだらかな傾斜から底部に急に下がり、護岸とみられる河原石を東西一列に配する。池の北端部のみを検出であり、池の大きさは不明であるが、さらに南方に延び、東西両方向に拡がる可能性が大きい。池の位置を考慮すれば、1町規模の宅地の可能性も考えられる。一方、新期の池239は、小石を敷きつめる洲浜をもち、汀はなだらかである。北端部には景石が残り、東側寄りに河原石で護岸した中島がある。北東から導水路とみられる溝が接合している。

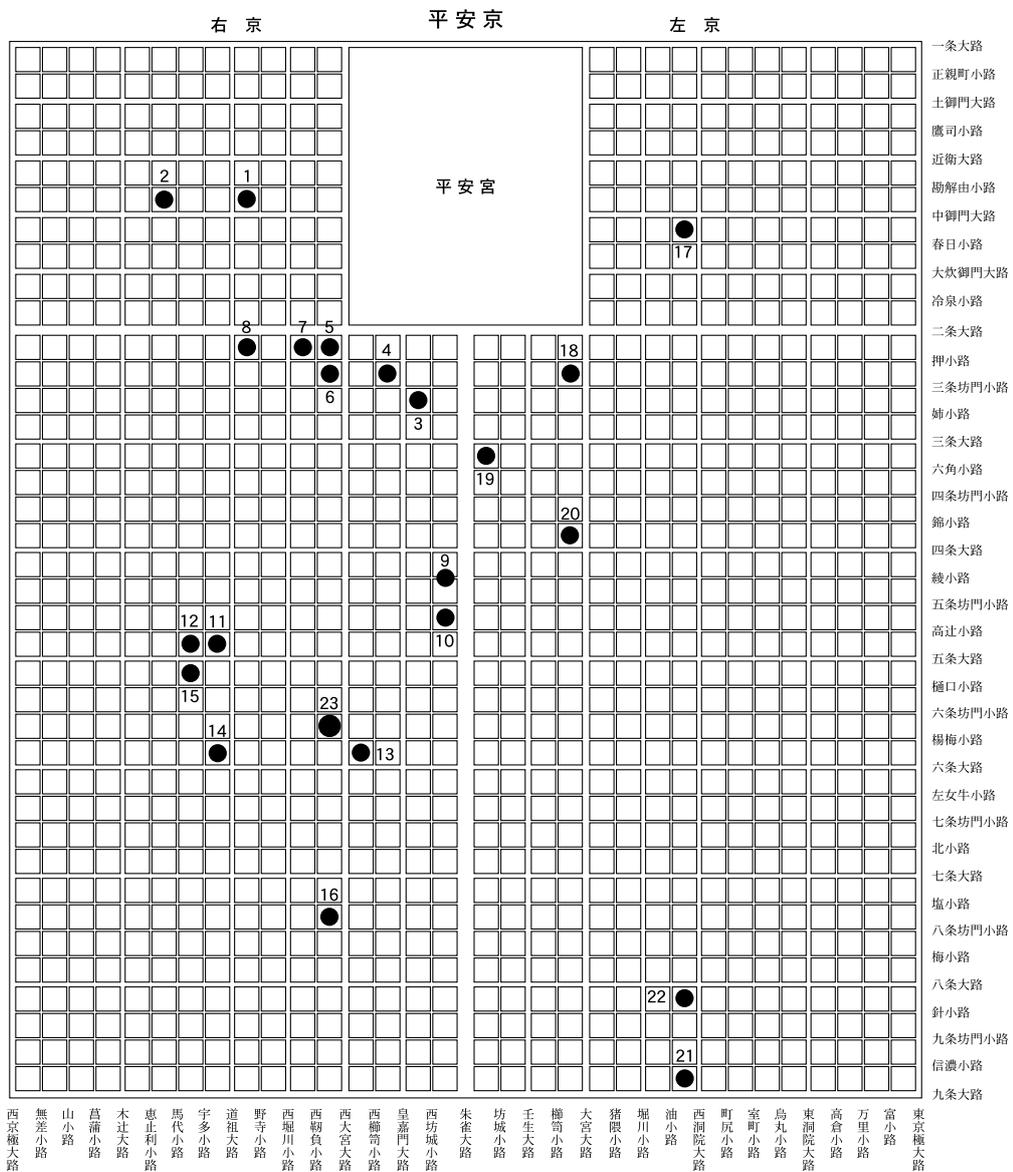
池239の中島に使用している石材にはチャート、砂岩、泥岩が主体で角礫岩、花崗斑岩、泥岩ホルンフェルスなどが少量含まれる。砂岩は割ってあるものが目立つ。池252の護岸および泉では、砂岩が主体でチャート、泥岩が含まれる。チャートには層厚3～4cmの層状チャートが含まれる。池の石材はともに円摩度の高い円礫であり、河原から採集してきたものであろう。距離から推測すると桂川からのものであろうか。

平安京内における平安時代前期に属する園池・泉の報告例はおよそ20件ある。これらを表5としてまとめ、図31に地点を記した。ここでは調査区に近い右京五条・六条域に位置する園池の例をみておく。

五条一坊二町(9)では、二町内中央部に拡がる洲浜を伴う園池を検出している。汀は拳大の礫を貼り付け、緩やかな傾斜で湾曲する。主体は西側に拡がり、南北幅は30mとみられる大型の池である。1町規模の宅地とみられる。五条一坊三町(10)では、三町内中央北部で洲浜を伴う園池を検出している。池の南岸の傾斜はやや急で、粘土貼りに拳大の礫を貼り付ける。汀は東西に拡がり、主体は北側に拡がる。1/2町規模の宅地とみられる。五条三坊四町(11)では、建物の南端から南へ5.4mほど離れたところで池を検出。東西12m以上、南北6mほどで、東から南に弧を描くような形状で、西北肩には小さな礫を敷いた洲浜がある。宅地は北東部の1/4町規模と考えられ、宅地内南東部に位置する。五条三坊五町(12)では、町の北東部で拳大の河原石を敷いた緩やかな傾斜の洲浜を検出した。さらに下層にも洲浜状遺構が認められることから、園池の修築、改修が認められる。宅地は北東部の1/4町規模と考えられる。宅地内東部に位置する。水源は佐井川の可能性がある。六条一坊十三町(13)では、拳大の玉石を用いた洲浜を伴う園池がある。汀は緩やかな勾配をもつ。池の北肩から約12m北に四面庇付きの建物がある。宅地は1町規模と考えられる。宅地内南西部に位置する。水源は旧流路で、低湿地を利用したとみられる。六条三坊四町(14)では、池を東西長7m、南北長1m分確認した。深さ0.7mあり、洲浜部に敷石の痕跡はない。大型建物の南10mに位置する。井戸の跡地を利用している。1町規模の宅地利用とみられ、宅地中心部に位置する。六条三坊八町(15)では、洲浜の葺石と思われる小礫の分布を確認した。木樋の導水施設北端には湧水層に達する枡があり、この部分が水源となる。北側には建物群が配される。宅地の南部中央に位置する。1町占地の宅地である。

以上の例に本件を加えて、洲浜の形態、水源などについてみてみる。六条三坊四町の例を除い

て、ほとんどの池で石敷きの洲浜を検出している。使用している石は、小さな礫から拳大の玉石までと多様であり、今回の様に景石を配する例もみられる。洲浜の勾配は緩やかな例が多くみられるが、五条一坊三町の例や今回の池252は急な傾斜となっており、その意匠も様々である。池の水源は、4例が泉や井戸跡地などの旧流路を利用しているとみられる。また、五条三坊五町の例では河川からの引き込みが想定されている。五条一坊二町をはじめとする他の3例については水源が不明であるが、周辺で旧流路が検出されている箇所があり、これを利用している可能性が高いとみられる。これらの園池は、悪条件ともなりうる右京の湿潤な土地環境を、巧みに利用して造られていることがわかる。



※ 調査地点の番号は表5の番号と対応する

図31 平安時代前期の園池検出地点

表5 平安時代前期の園池検出地点一覧表

番号	地点	所在地	調査概要	文献
1	右京一条二坊十三町	中京区西ノ京円町55-1	建物、園池、東肩に礫が残存、遣水は北方から南流して池に注ぐ。	文1
2	右京一条三坊十二町	右京区花園藪ノ下町	園池は東西40m、深さ1.5mを検出。池中央最深部に南北方向の溝がある。	文2
3	右京三条一坊六町・百花亭	中京区西ノ京小倉町・西ノ京梅尾町	2時期の園池、縮小改修が認められる。10~20cmの石を突き固めた洲浜。傾斜は急で比高差0.65mある。	文3・4
4	右京三条一坊十町	中京区西ノ京永本町	柱穴群、溝、園池、拳大の石や瓦を貼り付ける。	文5
5	右京三条二坊一町	中京区西ノ京銅駝町	園池、2段の落差、1段目に玉石の痕跡、島状の張り出し。	文6
6	右京三条二坊二町	中京区西ノ京銅駝町68番地	建物、柱穴、溝、泉、30~50cmの河原石、埋土にも複数あり。	文7
7	右京三条二坊八町	中京区西ノ京原町	2時期の園池、古期は南北長方形、新期は東に大きく広がる。泉。人頭大の河原石（北山石を含む）が1列。	文8・9
8	右京三条二坊十六町・斎宮	中京区西ノ京東中合町1（西京商業高校）	建物、溝、園池、泉、蒸籠組の木枠、景石の据付穴、玉石を敷き詰めている。	文10
9	右京五条一坊二町	中京区壬生高樋町	宅地内に広がる洲浜を伴う園池北岸、拳大の石と粘土を貼り付けた緩やかな洲浜。	文11
10	右京五条一坊三町	中京区壬生松原町	洲浜を伴う園池南岸、拳大の石と粘土を貼り付けたやや急な洲浜。	文11
11	右京五条三坊四町	右京区西院矢掛町（西院中学校）	建物、園池、小さな礫を敷いた洲浜、東から南に弧を描くような形状。	文12
12	右京五条三坊五町	右京区西院太田町26-1	拳大から20cmほどの河原石を敷いた洲浜および池。下層にも洲浜を確認。	文13
13	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町（旧大坂ガス京都工場跡地）	建物、溝、園池、拳大の玉石を用いた洲浜。汀は緩やかな勾配。	文14
14	右京六条三坊四町	右京区西院溝崎町21番地（ローム株式会社）	建物、園池、深さ0.7m、井戸の跡に造成、洲浜部に敷石の痕跡なし。	文15
15	右京六条三坊八町	右京区西院追分町（島津製作所五条工場跡地）	建物、園池、遣水、泉、導水施設と堰き止める施設。葺石と思われる小礫。	文16
16	右京八条二坊二町	下京区西七条石井町61（市立七条小学校）	建物、園池、護岸施設、木桶状の施設、堤防状の施設。	文17
17	左京二条二坊十六町・高陽院	中京区横鍛冶町	築山、溝、園池、景石（丹波帯の岩石）、砂化粧。	文18
18	左京三条一坊・神泉苑	中京区門前町	園池、遣水、船着き場、拳大からそれより少し大きい礫が敷かれていた。	文19
19	左京四条一坊一町	中京区壬生朱雀町（朱雀第一小学校）	建物、溝、園池、導水施設、柵状施設、10~30cmの大量の石。	文20
20	左京四条一坊十三町	中京区壬生坊城町5-15	井戸、池状遺構、中島状に造りだしている。	文21
21	左京九条二坊十三町	南区西九条春日町	溝、流路、池状遺構、河原石や砂利を敷いた洲浜。	文22
22	左京九条二坊十六町	南区西九条鳥居口町	園池、小型の水汲み施設、石敷きの汀、拳大かそれより小さめの礫。	文23
23	右京六条二坊三町	下京区西七条東御前田町・西七条赤社町	2時期の園池、古期は泉をもつ、新期は東西幅を狭め島をもつ。	本調査

参考文献 (表5 平安時代前期の園池検出地点一覧表)

- 1 「平安京右京一条二坊」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 2 「平安宮左馬寮一朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999 年
- 3 「平安京右京三条一坊 2」『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
- 4 『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 5 「平安京右京三条一坊 2」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000 年
- 6 「平安京右京三条二坊一町跡 No.40」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
- 7 「平安京右京三条二坊二町」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局 2004 年
- 8 「平安京右京三条二坊 1」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
- 9 「平安京右京三条二坊」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
- 10 『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 21 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 11 『山陰線四条～松原間立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査広報発表資料』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 12 「平安京右京五条三坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
- 13 「平安京右京五条三坊五町跡 No.40」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 3 年度』京都市文化観光局 1991 年
- 14 「平安京右京六条一坊十三町」『平成 8 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998 年
- 15 『平安京右京六条三坊一ローム株式会社社屋新築に伴う調査一』古代文化調査会 1998 年
- 16 『平安京跡研究調査報告第 20 冊 平安京右京六条三坊』(財)古代学協会 2004 年
- 17 「右京八条二坊」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
- 18 「平安京左京二条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和 63 年度』京都市文化観光局 1989 年
- 19 「平安京左京三条一・二坊・神泉苑・史跡旧二条離宮」『平成 3 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
- 20 「平安京左京四条一坊」『平成 4 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
- 21 『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 22 「平安京左京九条二坊」『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
- 23 「平安京左京九条二坊」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000 年



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうにぼうさんちょうあと							
書名	平安京右京六条二坊三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-25							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょうにぼうさんちょう 六条二坊三町 あと 跡	きょうとし 京都市下京区 西七条東御前 田町地内	26100		34度 59分 46秒	135度 44分 06秒	2006年11月 28日～2007 年3月16日	1,160m <sup>2</sup>	道路拡幅 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 六条二坊三町 跡	都城跡	古墳時代	流路	土師器、須恵器	平安時代前期の新 旧2時期の園池を 検出			
		平安時代	池、土壇、埋納土 壇、溝、柵、土取 り跡、柱穴、整地 層	土師器、黒色土器、須 恵器、灰釉陶器、緑釉 陶器、輸入陶磁器、瓦、 軒瓦、土製品、木製品、 金属製品、石製品				
		室町時代	耕作溝	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、輸入陶磁器、 銭貨				
		江戸時代	耕作溝、柵	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25  
平安京右京六条二坊三町跡

発行日 2007年3月19日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社  
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961